

研究ノート：

特別講演「文学への誘い―別府を読む・別府を書く―」 配布資料

本資料は、2016年1月30日に開催された特別講演「文学への誘い―別府を読む・書く―」（主催・本学大学院文学研究科 日本語・日本文学コース）にて配布されたものである。

当該講演は、円城塔氏、福永信氏、澤西祐典氏（本学講師）の三名の鼎談形式で行われ、第一部「別府を読む」では、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）サイトを「別府」で横断検索した結果をもとに、近代文学において「別府」がどのように描かれてきたのか、作家・作品を横断しながら概観し、続く第二部「別府を書く」では、三氏がそれぞれ書き下ろした、「別府」を含む、新たな小説の断片を発表した。鼎談の内容は、『すばる』（2016年7月号）に採録されているので、ここでは省略する。

三氏が書き下ろした断片は、後日、完全版が『大分合同新聞』（2016年4月30日）に掲載され、2017年1月2日には、著作権放棄の上、青空文庫に登録され、無料公開されている。それぞれの作品は、下記の通り。円城塔「ぞなもし狩り」、福永信「グローバル・タワーにて」、澤西祐典「湯けむり」である。

本資料は、第一部「別府を読む」の際に使用された。すでに記した通り、青空文庫を「別府」でgoogle検索機能をつかって横断検索し、ヒットした作品から、当該箇所を（前後の段落を含めて）抽出して作成したものである。

作成日時は2015年12月26日で、その時点で青空文庫サイトに登録があった作品が対象となっている。ただし、作品に「別府」という言葉が含まれている場合でも、大分県の地名「別府」以外を指す場合は除外した（人名を指す場合や、同名で別の地名を指す場合などがあつた）。

掲載順は、作成時に検索サイトに引っかかった順番に依拠し、順に番号を附し、作者名、作品名も記した。また同一作品内で、複数個所に「別府」が登場する際は、同一番号の後にアルファベットを附している。また「別府」の文字には、太字・ゴシックに書体を変換し、ルビについては適宜省略した。

作品一覧

- 【1】 徳田秋聲「佗しい放浪の旅」
- 【2】 織田作之助「雪の夜」
- 【3】 種田山頭火「道中記」
- 【4】 中谷宇吉郎「由布院行」
- 【5】 野口雨情「おさんだいしよさま」
- 【6】 宮本百合子「九州の東海岸」
- 【7】 西東三鬼「美女」
- 【8】 杉田久女「瓢作り」
- 【9】 宮本百合子「長崎の印象（この一篇をN氏、A氏におくる）」
- 【10】 坂口安吾「囲碁修行」
- 【11】 織田作之助「放浪」
- 【12】 岸田國士「述懐」
- 【13】 柳田國男「木綿以前の事」
- 【14】 北大路魯山人
「河豚食わぬ非常識」
- 【15】 濱田耕作「温泉雜記」
- 【16】 吉川英治「隨筆 新平家」
- 【17】 若山牧水「姉妹」
- 【18】 中里介山「大菩薩峠めいろの巻」
- 【19】 倉田百三「青春の息の痕」
- 【20】 吉川英治「折々の記」
- 【21】 金史良「玄界灘密航」
- 【22】 吉川英治「河豚」
- 【23】 萩原朔太郎「石段上りの街」
- 【24】 酒井嘉七「両面競牡丹」
- 【25】 長谷川時雨「柳原燐子（白蓮）」
- 【26】 宮本百合子「日記 一九二六年（大正十五年・昭和元年）」

- 【27】 内田魯庵「研友社の勃興と道程——尾崎紅葉——」
- 【28】 岸田國士「明日は天気（二場）」
- 【29】 佐藤垢石「葵原夫人の鯛釣」
- 【30】 宮本百合子「石油の都バクーへ」
- 【31】 佐藤垢石「海豚と河豚」
- 【32】 柳宗悦「手仕事の日本」
- 【33】 神西清「地獄」
- 【34】 坂口安吾「安吾巷談 熱海復興」
- 【35】 織田作之助「競馬」
- 【36】 吉川英治「夕顔の門」
- 【37】 古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和十四年」
- 【38】 神西清「少年」
- 【39】 夢野久作「名娼満月」
- 【40】 柳田國男「日本の伝説」
- 【41】 小出檜重「大切な雰囲気」
- 【42】 長塚節「長塚節歌集 下」
- 【43】 海野十三「蠅男」
- 【44】 柳田國男「こども風土記」
- 【45】 夢野久作「あやかしの鼓」
- 【46】 賀川豊彦「空中征服」
- 【47】 牧野富太郎「植物一日一題」
- 【48】 夢野久作「東京人の墜落時代」
- 【49】 柳田國男「野草雜記・野鳥雜記」
- 【50】 北原白秋「夢殿」
- 【51】 種田山頭火「行乞記」
- 【52】 平野萬里「晶子鑑賞」
- 【53】 古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和十五年」
- 【54】 牧野富太郎「植物記」

【1-a】徳田秋聲「佗しい放浪の旅」

別府も私の行つた時分は、創始時代とでもいふのであつたらう。居るあひだに不老泉といふ階上階下の浴槽開きのお祝ひなどあつた事を覚えてゐるが、今は全然趣きが変わつてゐるらしい。多分日露戦争以後どんどん開けたのだと思はれる。だから私が行つた時分葭簾張や菰^{こも}囲ひであつたやうな湯までが、今は立派な浴湯になつてゐるに違ひない。何しろ全市到る処湯の沸かないところはないくらいで、普通の人家にも庭に浴槽があり、田圃道を歩いてゐると思はぬところに清澄な温泉が煙を立ててゐたりする。この町につづいた浜脇といふところには又砂風呂といふのがあつて、囲ひの枠に頭と足をもたせて、砂のなかに体を半分埋めてゐると、下から湯が噴き出して来る。広大なその種類の浴場が幾個もあつた。湯の豊富なことは恐らく世界一で、更に町を離れて大きな石塊の磊^{ころころ}磊^{ころ}してゐる野を突切つて観音寺へ行つて見ると、そこは大友宗麟(?)の居城の跡とかで見晴らしのいい高台に温泉が湧いてをり、そこから奥へ入つて行つて、かなわの湯だとか明礬の湯だとか半里か一里ごとに色々な温泉が噴出してゐる。海法師海地獄などへも、私は観音寺で出来た連と一緒に乗物で見に行つたもののだが、其の辺は一体に田圃や流れのなかからもぷすぷす硫黄くさい煙が立つてゐた。私はその後伊豆の温泉などへ行つたが、あれほど湯の豊富なところがないので、何となく物足りない気がしたほどである。それと同時に火のうへにゐるやうな日本といふ島国の不安さも貧寒さも思はれる訳で、日本が遅蒔きながら大陸進出を目論むのも無理からぬことではある。淫蕩な有閑階級や隠居の遊び場所である温泉の代りに、石油が無限に噴き出すとか宝石や金や鉄が到るところに採掘されるとかいふことだつたら、日本も亦相当恵まれた国土である訳だが、生産物が少しあるとしたところで、大衆までは行きわたらず、栄養価の乏しい米を頼りにして生きてゐるのは心細い。

【1-b】徳田秋聲「佗しい放浪の旅」

するうち私はひどい熱病にかかつて、山の方にある病院へ診てもらひに行つた。多少は快くなつた筈の胃のアトニイは相変わらずで、食べものが不自由

なので、後戻りした形だつたが、気管支もひどく悪くなつてゐた。私の肺気腫は淵源が頗る遠いので、曾て博文館時代にも、熱病を放抛つておいて、到頭ひどいことになつたのだが、別府でもそれに罹つた訳である。それに二月も東京を離れて、遊惰な日を送つてゐたので、何となく不安と焦燥を感じて来た。ちやうど佐々醒雪氏（後に博士）から手紙が来て、金港堂で、文芸界（？）が創刊され、初号の巻頭に小杉天外氏が書くことになつてゐて、二号の分を私に書くやうにと言つて来たのが、大阪から附箋になつて廻つて来た。遊惰は遊惰でも、私はさうして温泉に浸つてゐるあひだも、いつも暗い気持ちで、果して小説を作る才能が自分にあるか否かが疑はれ、前途に不安を感じてはゐたので、佐々氏の手紙に接すると、遽に文壇のことが気にかかり出して、何か緊張した気持ちになるのであつた。それに京都の日の出新聞にゐる中山白峰氏からも手紙が来て、消息もたえてしまつた私のことを、先生が怒つてゐるらしかつた。私は咽喉が少し快くなりかかつて来たところで、或る日遽かに人々に別を告げて、船に乗つた。そして乗つた瞬間から、私の熱病はけろりと癒つてしまつた。船の酔ひが一步上陸した瞬間に癒ると同じなのである。

【1-c】徳田秋聲「佗しい放浪の旅」

その後私は時々別府を思ひ出すのだが、別府へ行けば福岡や博多、長崎などへも寄りたいし、中国や四国も見たくなるから、大阪や京都へ行くことがあつても、何時も別府まで延さうといふ機会もなく過ぎてしまつたのである。私は帰りにちよつと京都を瞥見した。京都には自由党の支部に長岡以来の渋谷黙庵氏がゐたが、帰りに立寄るやうに言つてよこしたので、白峰氏の家に一兩日足を止めることにした。それが何の辺であつたのか、頓と見当もつきかねるが、塾にゐる時分、僅か四銭か三銭五厘かのパイレート一つ買ふのに三四人で出しつこをして、時によると一本の紙巻を半分に分けて、分配したほどの貧乏であつたのに、京都における彼は相当広い部屋が三つもある二階の書齋に頑張つて、母堂と夫人と三人家族に落着いてゐたのである。佗しい放浪の旅をつづけてゐる私には、白峰氏の気取つた家庭振が、何か可笑

しいやうでもあつたが、自分の姿が寂しいやうな感じでもあつた。渋谷氏は二度も私を迎ひに来たが、或る日其の頃政友会の幹部であつた尾崎行雄氏が醍醐寺を訪問するといふので、案内役の渋谷氏が私をも誘つたので其の一行に加はり、所謂醍醐の花見で有名な其の寺を訪れ、宝物を見せてもらつたが、本当の案内役は島文博士であつた。花見の折の諸大名の短冊の綴込みを見たことだけは、今でも覚えてゐるが古画のうちには国宝もあつたやうである。私はそこで精進料理を御馳走になつたが、美術など鑑賞してゐる余裕は、勿論私にはなかつた。母堂や白峰氏の案内で、四条や三条、御所や嵐山、清水、金閣寺、祇園の都踊りなども見たが、京都で遊ぶには私の気分はすこしあわただし過ぎたし、懷中も寂しすぎたのである。私が先生へのお土産に鯉の丸揚げ（つまり支那料理の紅焼鯉に似たもの）をもつて東京へついたのは、下宿の窓は若楓の葉がそよいでゐる晩春のことであつたが、京都を立つとき、駅で其のたれの入つた壺を落して壊してしまつたので、遺憾ながら鯉だけ届けたのも滑稽であつた。

【1-d】徳田秋聲「佗しい放浪の旅」

下宿のお神が、別府の或る旅館の娘であることも、この旅行から帰つて来て初めて分つたのだつたが、ちよつと大阪へ行つて来ると言つて年の暮に出たきりだつたので、荷物もいつか物置きに仕舞ひこまれてあつた。

【2-a】織田作之助「雪の夜」

しかし、さすがに流川通である。雪の下は都会めかしたアスファルトで、その上を昼間は走る亀ノ井バスの女車掌が言うとおりの「別府の道頓堀でございます」から、土産物屋、洋品屋、飲食店など殆んど軒並みに皎々と明るかった。

【2-b】織田作之助「雪の夜」

「珈琲ならどこがよろしおまっしゃろ。別府じゃろくな店もおまへんが、

まあ「ブラジル」やったら、ちょっとはましでっしゃろか」

【2-c】織田作之助「雪の夜」

東京へ行った由噂にきいてはいたが、まさか別府で落ちぶれているとは知らなんだ——と、そんな言葉のうらを坂田は湯気のおいと一緒に胸に落した。そのあたり雪明りもなく、なぜか道は暗かった。

照枝と二人、はじめて別府へ来た晩のことが思い出されるのだった。船を降りた足で、いきなり貸間探しだった。旅館の客引きの手をしょんぼり振り切って、行李を一時預けにすると、寄りそうて歩く道は、しぜん明るい道を避けた。良いところだとはきいてはいたが夜逃げ同然にはるばる東京から流れて来れば、やはり裏通の暗さは身にしみるのだった。湯気のおいもなにか見知らぬ土地めいた。東京から何里と勘定も出来ぬほど永い旅で、疲れた照枝は口を利く元気もなかった。胸を病んでいて、あこがれの別府の土地を見てから死にたいと、女らしい口癖だった。温泉にはいれば、あるいは病気も癒るかも知れないと、その願いをかなえてやりたいにも先ず旅費の工面からしてかからねばならぬ東京での暮しだったのだ……。

【2-d】織田作之助「雪の夜」

それでも、売って、その金を医者への借金払いに使い、学生専門の下宿へ移って、坂田は大道易者になった。かねがね八卦には趣味をもっていたが、まさか本業にしようとは思ひも掛けて居らず、講習所で免状を貰い、はじめて町へ出る晩はさすがに印刷機械の油のおいを想った。道行く人の顔がはっきり見えぬほど恥しかったが、それでも下宿で寝ている照枝のことを想うと、仰々しくかっと眼をひらいて、手、手相はいかがです。松本に似た男を見ると、あわただしく首をふった。けれども松本のことは照枝にきかず、照枝も言わず、照枝がほころびた真綿の飛び出た尻当てを腰にぶら下げているのを見て、坂田は松本のことなど忘れねばならぬと思った。照枝の病気は容易に癒らなかった。坂田は毎夜傍に寝て、ふと松本のことでカッとのほせて来る頭を冷たい枕で冷やしていた。照枝は別府へ行って死にたいと口癖

だった……。

【2-e】織田作之助「雪の夜」

そうして一年経ち、別府へ流れて来たのである。いま思い出してもぞっとする。着いた時、十円の金もなかったのだ。早く横になれるところをと焦っても、旅館はおろか貸間を探すにも先ず安いところをという、そんな情ない境遇を悲しんでごたごたした裏通りを野良猫のように身を縮めて、身を寄せて、さまよい続けていたのだった。

【2-f】織田作之助「雪の夜」

喫茶店で一円投げ出して、いま無一文だった。家に現金のある筈もない。階下のゆで玉子屋もきょうこの頃商売にならず、だから滞っている部屋代を矢のような催促だった。たまりかねて、暮の用意にとちびちび貯めていた金をそっくり、ほんの少しだがと、今朝渡したのである。毎年ゆで玉子屋の三人いる子供に五十銭宛くれてやるお年玉も、ことしは駄目かも知れない。いまは昔のような贅沢なところはなくなっているが、それでも照枝はそんなことをきちんとしていた気性である。毎日寝たきりで、思いつめていては、そんなことも一層気になるだろう。別府で死にたいと駄々をこねて来たものの、三年経ったいまは大阪で死にたいと、無理を言う。自分のような男に、たとえ病気のからだとは言え、よく辛抱してついて来てくれたと思えば、なんとかして大阪へ帰らせてやりたい。知った大阪の土地で易者は恥しいが、それも照枝のためなら辛抱する、自分もまた帰りたい土地なのだと、思い立って見ても、先立つものは旅費である。二人分二十円足らずのその金が、纏ってたまったためしもなかったのだ。

【3-a】種田山頭火「道中記」

三月十八日 晴、霜、彼岸入、別府。

【3-b】種田山頭火「道中記」

亀川まで汽車、賃四十七銭は惜しかつたが、——亀川にはほどよい宿が見つからないので、電車で別府へ、F屋に地下足袋を脱ぐ、さつそく一浴して一杯！ おそくまで散歩して熟睡。

別府は山もよろしく海もよろしく、湯はもちろんよろしく、女もわるくないらしい。

時局のために遊覧客は多くないらしいが、それでも二千や三千はあるらしい。

いたるところ温泉、いたるところをなごや、湯はタダ、女も安いさうな。遊園別府、貧乏人や偏屈者の来る場所ではない。

【3-c】種田山頭火「道中記」

別府所見、——

小秦淮、朝見川朝日橋のほとり、竹田が妓にかく書いて与へたといふが、夜はともかく、昼はゴモクアクタでワヤだ！

別府竹枝、流川通、名残橋^ア、カフェーやおでんやや料亭や置屋があつまつてゐる。

高崎山のおもしろさ、鶴見岳のよろしさ。

旅の人々と彼等の財布を狙ふ街の人々と、温泉^{イデユ}の匂ひ、脂粉の香り。土産物売る店と女を売る店と。

【4-a】中谷宇吉郎「由布院行」

伯父のいるのは由布院という所で、九州の別府温泉と同じ系統に属する辺部の温泉地である。温泉地といっても、別府から六里の峠を越した盆地の中で、九州でも「五箇^{こかのしやう}荘か、由布院か」といってからかわれる位の山の中なのである。

【4-b】中谷宇吉郎「由布院行」

由布院へは中学の時に一度行ったことがある。その頃は伯父も別府にいて、夏休みに弟と一緒に遊びに行った時、由布山へ登るといので、伯父が二人をつれて行ったのである。その時は六里の峠に馬の通る道があっただけで、折角のいい温泉がありながら、宿屋などといっても、極めてお粗末なのが二軒ばかりあっただけだった。勿論この附近は、五里四方位どこを掘っても温泉が出るのだから、別に大したことはないであろう。それが、今度は大分沢山宿屋も出来て、別府から食料品を運ぶ都合で乗合自動車を通うようになっていた。

【4-c】中谷宇吉郎「由布院行」

この道位、自動車で馳^{はし}って気持のよい所は少いだらう。何しろ三千尺^{びやく}の峠を越して、由布院の盆地が二千二百尺の高さなのである。六里の高原を、一時間半自動車が走りつづける。山が急なために、道は色々に折れて、溪^{たに}に沿いながら登って行く。アメリカの活動によく、広々した高原を見渡ししながら、自動車が山腹を縫って走るところがあるが、丁度あのような所なのである。大きい岩^{かげ}の蔭で急に道が折れる時など、自動車が丁度天^かへ馳^{はし}け昇るような気がする。岩を越して、その裏に脈々として続く道を見るまでは、随分冷や冷やすることもある。時々ふり返ると、別府湾がだんだん低く小さくなって行く。登りつめた頃から、周囲は茅^{かや}の草原になる。鶴見山、由布山のなだらかな麓^{ふもと}に、針葉樹の黒い密林が望まれる。そして緑の高原が遠く続いて、ゆるやかな起伏に沿って、所々に黒土の道があらわれている。自動車は安心したように全速力を出す。ここまで来ると、急に空気^{ひや}の冷やかさに気が付く。

【4-d】中谷宇吉郎「由布院行」

伯父の家は、金鱗湖^{きんりんこ}という小池のふちの茅葺^{かやぶき}の家である。別府で一流のKというホテルの主人の別荘地^{ひら}を拓いているのである。伯父も変り者であるが、Kの主人はまた一層変っている。こんな山の中に六千坪の地面を買いこんで、金鱗湖などという池まで取り入れて、それを全部伯父に預けて、その趣味の

ままの庭園を拓かせようというのであるから、その計企^{けいき}からして世離れがしている。伯父が遠い国からやって来て、別府に移り住んで間もない頃、雑草のようなものを鉢に植え込んで軒先に出して置いたのを、Kの主人が通りがかりに見て、感心してはいり込んで来たので知り合いになったのだそうである。

【5】野口雨情「おさんだいしよさま」

別府温泉小唄

海地獄

海の中かと

思ふてあたりや

別府海地獄

山の中

鶴見地獄

おさへきれない

わたしの胸は

ちやうど鶴見の

活地獄

八幡地獄

わたしや別府の

八幡地獄

ぶつりぶつりと

日を暮らす

血の池地獄

とてもかなしや

血の池地獄

とてもこの世と
思はれぬ

坊主地獄

因果地獄を
見たけりやおいで
因果地獄は
坊主地獄

【6-a】宮本百合子「九州の東海岸」

これは、別府でふと心づいたことだが、九州を歩いて見、どこの樹木でも大体本州の樹より細幹とても云うのか、すらりと高く繊細な感じをもっているのは意外であった。勿論釣合の上のことで、太い大木だって在る。けれども決して、北国の樹のように太短くはない、太ければ太いだけ梢を高く高く沖している。それらが房々青葉をつけて輝いている。いかにも軽やかに、明るい。大分白杵という町は、昔大友宗麟の城下で、切支丹渡来時代、セミナーオなどあったという古い処だが、そこに、野上彌生子さんの生家が在る。白杵川の中州に、別荘があって、今度御好意でそこに御厄介になったが、その別荘が茶室ごのみでなかなかよかった。白杵川は日向灘とつながって潮の満干が極めて著しい。白杵へ出入りする船の便宜を計って、川と中島との間に橋というものは一つもない。軽舟に棹さして悠暢に別荘への往復をするのだが、楓樹の多いこの庭が、ついた日の暮方夕立に濡れて何ともいえない風情であった。植込まれた楓が、さびてこそおれ、その細そりした九州の楓だから座敷に坐って、蟹が這い出した飛石、苔むした根がたからずと数多の幹々を見透す感じ、若葉のかげに一種独特な明快さに充ちている。茶室などのことを私は何も知らないが東京や京都で茶室ごのみというと、清々しくはあるが余り暗い茶室。暗い、木下暗、なんだかそういう連想がある。光線が暗いという上心持の晦渋さをも幾分含む。それには、植込の樹にも大分関係あるらしいことが九州へ来て分った。九州の樹は前にも云う通りすらりと高

い。木によって違うだろうが楓なら、坐った高さで先ず若葉ごしの日光を受ける幹が目に入る程よくこみ合い、根を張った樹の幹の眺めは、心を落つかせ、実によいものだ。樹幹の風致を充分味わせながら、当然青葉若葉も瞳に映る。明るく、^{しっか}確りしてい、同時に溢れる閑寂を感じる。

【6-b】宮本百合子「九州の東海岸」

私共はそもそも初めの予定では鹿児島の方へは廻らない積りだった。廻ったらとても旅費が足りない。ところが、別府が危ぶんでいた通り思わしくなかったので、それではと鹿児島廻りで長崎へ行こうとたつたのであった。どうせ大淀を通るなら、一寸汽車を工面して見るのも悪くない。四時間ばかり余裕を見て、大淀駅から青島行自動車に乗った。豊後から日向に入ると、景色が変わった。豊後の、海沿いに島があったり、入江があったり、実に所謂いい景色にちんまりしていたのが、日向にかかると、風景がずっと放胆で平原的になった。広々した畑、関西風な村を抜けて自動車が青島へ向い駛るにつれ、私は段々愉快で堪らなくなって来た。別府、臼杵、経て来た町にないおどかさが日向という国には満ちている。日向と書く文字に偽りなく、ここは明るい。平明に、こだわりなく天と地とがぼーっと胸を打ち開いて、高らかな天然の樹木、人間の耕作物をいだきのせている。自動車という文明の乗物でできた村街道を進むのではあるが、外の自然を見ていると、空気に、日光に、原始的な、神代めいた朗かさ、自由さ、豊富さが横溢して指の先へまで伝わって来るのだ。

【7】西東三鬼「美女」

私にも遠い昔に青年時代があつて、大きな船で外国へ出稼に行つた経験があります。その船にくらべて、別府航路の船の何とチマチマしてゐることよ。それでゐてチャンと船なのです。ドラも鳴りますし、出帆の汽笛も鳴るので。すると眼と鼻の先にある人々が、船と陸からテープを投げ合ふのです。

【8】杉田久女「瓢作り」

まづ門傍のポプラの枝へはひ登つて、ぶらりと下がつてゐる大瓢が一つ。これはまるでくくりのない、丁度貧乏徳利みたいにそこ肥りのした奴。私がこないだ虚子先生にお目にかかりに別府迄行つてきて、汗の単帯をときすてるとすぐ見に行つたら、ほんの二日の間に見違へるほど快よくまつ青く太つてゐた。あんまりのつべりとくくりがないので一体瓢箪ひょうたんだらうか白瓜か、もしくは信州辺でゆふごと言つてゐるかんべうを作る瓜なのか、などと家中で評定とり／＼だつたが、やはりずぼらながら瓢箪であるらしい。実に大まかな気楽げなかつかうをして、夕立雨の時などはうぶ毛の生えたまつ青な肌をポト／＼と雫がつたふ。夕立晴の雲がうごく頃には、柄の長い純白な瓢の花が、涼しげに咲き出す。この外にもポプラの樹に這ひついてゐる瓢が三本。之れはアダ花が咲くのみで、まだドンな形のとも見当がつかない。

【9-a】宮本百合子「長崎の印象（この一篇をN氏、A氏におくる）」

大体、私共は旅行に出てから十日余、天気の数では幸運であつた。京都にいた間、また、九州に来てから別府、臼杵などにいた間、塵をはずめる打ち水となる程度の降雨に会つただけで、ために予定を変えるような目には遭わなかつた。日向で青島へ廻つた日、鹿児島で一泊したその翌日、特に快晴で、私達は、世にも明るい日向、薩摩の風光を愛すことが出来た。五月九日という日づけにだまされ、二人とも袷の装であつた。鹿児島市中では、樟くすのぎの若葉の下を白緋の浴衣がけの老人が通るといふ夏景色であつた。反射の強い日光を洋傘一つにさけて島津家の庭を覗、集成館を見物し、城山に登る。城山へは、宿の横手の裏峡道から、物ずきに草樹を掻き分け攀じ登つたのだから、洋服のYは泰然、私はひどく汗を掻いた。つい目の先に桜島を泛べ、もうつと暑気で立ちこめた薄霧の下に漣一つ立てずとろりと輝いていた湾江、広々と真直であつた城下の街路。人間もからりと心地よく、深い好意を感じたが、思い出すと、微に喉の渴いたような、熔りつけられた感覚が附随して甦つて来る。そこを立って来た夜半に、計らず聴いた雨の音故一きわすがすがしく、

しめやかに感じたということもあろう。鳥栖^{とす}で、午前六時、長崎線に乗換る時には、歩廊を歩いている横顔にしぶきを受ける程の霧雨であった。車室は、極めて空いている。一体、九州も、東海岸をずーっと南に降る線、および鹿児島から北に昇って長崎へ行く列車など、実に閑散なものだ。窓硝子に雨の滴のついた車室にいるのは、私共と、大学生一人、遠くはなれて官吏らしい男が二人乗り合わせているぎり。海岸に沿うて、汽車は山腹を潜っては出、潜っては出、出た時にやや荒れ模様の海の景色が右手に眺められる。私共は、今日雨降りて却ってよかったと思った。南風崎^{はまのさき}、大村、諫早^{いさはや}と通過する浜の黒々と濡れた磯の巖、灰色を帯びた藍にさわめいている波の鬣^{もぐら}、舳^{むち}つた舟の檣^{はしら}が幾本となく細雨に揺れながら林立している有様、古い版画のような趣で忘れられない印象を受けた風景全体の暗く強い藍、黒、灰色だけの配合色は、若し晴天だったら決して見られなかったに違いない。

【9-b】宮本百合子「長崎の印象（この一篇をN氏、A氏におくる）」

生来地図好きなYは、新しい町に到着し、先ず其処の地図を拡げる時、独特な愉快を感じるらしい。今度、長崎に来たのだから、謂わばYのこの地図に対する情熱が大分原因となっていた。最初、私共は、小石川老松町の家において、四月二十七日に自分達が東京駅から九州へ出発しよう等と夢にも考えていなかった。三月初旬に、Yは大腸カタルをした。家には食物の養生が厳格に行かない。「病院へ入る方がいいのよ、」と私が云った。「そう——だが温泉に行きたいな。」この一言が、我々を九州まで運ぶ機縁になろうと誰が思いがけよう。「温泉で——何処?」「別府どんなだろう。」「いやよ、駄目でしよう、あんな処! 俗地らしくてよ。」四月十五日過、二十日過、Yの或る仕事のきりがつく見込みがついたら、私共は遂に自制力を失った。仕様がな、何処から旅費が出るのよ、と困りつつ、嬉しさ一杯で私達が神戸迄の切符を買ってしまった。紅丸で別府へ行った。ここは予測の通り余り気に入らず、豊後の臼杵へ廻った。臼杵から先、中津の自性寺を見、福岡の友でも訪ねるか、いずれにせよ、輕少の財囊に準じて謙遜な望みしか抱いていなかった。臼杵の、日向灘を展望する奇麗な公園からK氏の別荘へぶ

らぶら帰る時であった。Y、「どうする？ やはり中津へ廻る？」「——ふうむ……」二人ながら進まない気持がある。天然痘がひどいのが一つ、小杉未醒氏の「大雅堂」によって、幾分自性寺の所蔵品に対する考えの変ったのが第二。「先刻地図を見たら、南を廻って長崎まで行くのも、小倉の方から行くのも大して違わないらしい。——折角来たんだから、どう？ 一廻りしちゃうじゃあないか」それこそ素敵だ！ Yは、卓越したパイ焼職人のように、上手に地図と時間表とを麵棒に使い、貧弱な旅費の捏粉を巧に長崎まで延して来たのであった。

【9-c】宮本百合子「長崎の印象（この一篇をN氏、A氏におくる）」

これは、種痘問答である。私共は別府にいる時既に知人から流行の天然痘予防の注意を受けていた。臼杵へ行くと、そこでは全町民強制種痘をしたという。まして、長崎へ行くのなら危険此上ないというK氏の言葉で、計らず臼杵町費の一端を掠め、S氏の種痘を受けた。私のは一日痒くそれきり。Yのは、吸収がよく怪しいと思っていると、十四五年ぶりの植疱瘡では無理もない、鹿児島市の市を歩いている頃からそろそろ妙になって来た。Y、縋帯の上からたたきながら「大丈夫、何でもない、ね、ね」と気休めを求めているが、昨日は気分悪く、目が醒めたら発熱していた。K氏からの紹介で、長崎図書館長、永山時英氏を訪ねる予定なのであった。私は独り俵で出掛けた。

【10】坂口安吾「囲碁修行」

毎晩つめかけて僕を悩ました連中のひとりに、関さんといふ好人物がゐた。昔はれつきとした酒屋の旦那だが、今は商売に失敗して、奥さんが林長二郎の家政婦になつて生計を立ててゐる。金さへ持つと、女が好きになる悪癖があつて、碁会所をやつてゐる最中にも、近所の怪しげな飲み屋の女中と別府へ心中にでかけて、ぼんやり帰つて来たりなどした愛すべき人物である。年は四十五歳。僕の眼鏡によつて、この人物を碁会所の席主といふ形にした。

【11-a】織田作之助「放浪」

夕方、梅田の駅につきその足で「リ、アン」へ行った。女給の顔触れも変わっていて、小鈴は居なかった。一人だけ顔馴染みの女が小鈴は別府へ駈落ちしたといった。相手は表具屋の息子で、それ、あんたも知ってるやろ、タンチー一杯でねばって、その代りチップは三円も呉れてた人や。気がつけば、自分も今はタンチー一杯注文しているだけだ。一本だけと酒をとり、菓物をおごってやって、オイチョカブの北田のことを訊くと、こともあろうに北田は小鈴の後を追って別府へ行ったらしい。勘定払って外へ出ると、もう二十銭しかなかった。夜の町をうろ／＼歩きまわり、戎橋の梅ヶ枝できつねうどんをたべ、バットを買うと、一銭余った。夜が更けると、もう冬近い風が身に沁みて、鼻が痛んだ。暖いところを求めて難波の駅から地下鉄の方へ降りて行き、南海高島屋地階の鉄扉の前にうずくまっていたが、やがてごろりと横になり、いつの間にか寝込んでしまった。

朝、生国魂神社の鳥居のかげで暫く突っ立っていたが、やがて足は田蓑橋の阪大病院へ向った。当てもなく生国魂まで行った、めに空腹は一層はげしく、一里の道は遠かった。途々、何故丸亀へ無心に行かなかったのかと思案したが、理由は納得出来なかった。病院へ訪ねて行くと、浜子は今度は眼に泪さえ泛べて、声も震えた。薄給から金をしぼりとられて行くことへの悲しさと怒りからであったが、しかし、そうと許り言い切れないほど、順平は見窄らしい恰好をしていた。言うも甲斐ない意見だったが、やはり、私に頼らんとやって行く甲斐性を出してくれへんのかとくど／＼意見し、七円恵んでくれた。懐からバットの箱を出し、その中に金をいれて、しまいこみながら、涙を出し、また、にこ／＼と笑った。浜子と別れると、あまい気持があとに残り、もっと／＼意見してほしい気持だった。玉江橋の近くの飯屋へは行って、牛丼を注文した。さすが大阪の牛丼は真物の牛肉を使っていると思った。木下の屋台店で売っていた牛丼は、繊維が多く、色もどす赤い馬肉だった。食べながら、別府へ行けば千に一つ小鈴かオイチョカブの北田に会えるかも知れぬとふと思った。

【11-b】織田作之助「放浪」

天保山の大坂商船待合所で別府までの切符を買うと、八十銭残ったので、二十銭で餡パンを買って船に乗った。船の中で十五銭毛布代をとられて情け無い気がしたが、食事が出た時は嬉しかった。餡パンで別府まで腹をもたす積りだった。小豆島沖合の霧で船足が遅れて、別府湾にはいったのはもう夜だった。山の麓の灯が次第に迫って来て、突堤でモリナガキャラメルのネオンサイン塔が点滅した。

【11-c】織田作之助「放浪」

船が横づけになり、棧橋にぱっと灯がつくと、あっ！ 順平の眼に思わず涙がにじんだ。旅館の法被を羽織り提灯をもったオイチョカブの北田が、例の凄みを帯びた眼でじっとこちらをにらんでいたのだ。兄貴！ 兄貴！ とわめきながら船を降りた。北田は暫くあっ気にとられて物も言えなかったが、順平が、兄貴わいが別府へ来るのんよう知ってたナという、阿呆んだら奴、わいはお前らを出迎えに来たんやないぞ、客を引きに来たんやと四辺を憚かる小声で、それでも流石に鋭くいった。

【11-d】織田作之助「放浪」

聞けば、北田は今は温泉旅館の客引きをしており、小鈴も同じ旅館の女中、いわば二人は共稼ぎの本当の夫婦になっているのだという。だん／＼聞くと、北田はかねてから小鈴と深い仲で、その内に小鈴は孕んで、無論相手は北田であったが、北田は一旦はいい逃れる積りで、どこの馬の骨の種か分るもんかと突っ放したところ、こともあろうに小鈴はり、アンへ通っていた表具屋の息子と駈落ちしたので、さては矢っ張り男がいたのかと胸は煮えくり返り、行先は別府らしいと耳にはさんだその足で来てみると、いた。温泉宿でしみりやっていると押えて、因縁つけて別れさせたことは別れさせたが、小鈴はその時——どない言いやがったと思う？ と、北田はいきなり順平にきいたが、答えるすべもなくぼかんとしていると、北田は直ぐ話を続けて——わては子供が可哀相やから駈落ちしたんや。どこの馬の骨か分らんような

でん公の種を宿して、認知もしてもらえんで、子供に肩身の狭い想いをさせるより、表具屋の息子が一寸間アが抜けてるのを倅い、しつこくもちかけて逐電し、表具屋の子やと否応はいわせず、晴れて夫婦になれば、お腹の子もなんぼう倅せや分らへん。そんな肚で逐電したのを因縁つけて、オイチョの北さん、あんたどない色つけてくれる気や。そんな不貞くされに負ける自分ではなかったが、父性愛というんやろか、それとも、一緒にいた女にたとえ何もしやへんという白を阿呆になって真にうけたにしろ、今更惚れ直したんやろか、気が折れて、仕込んで来た売屋の元も切れ、宿賃も嵩んで来たまゝに小鈴はそこで女中に雇われ、自分は馴々しく人に物いえる腕を頼りにその客引きになることに話合いしたその日から法被着て棧橋に立つと、船から降りて来た若い二個連れの女の方へわざと凭れかゝるように寄りそうて、鞆をとり、ひっそりした離れで、はゞかりも近うございます、錠前つきの家族風呂もございますと連れこんで、チップもいれて三円の儲になった。金を貯めて、小鈴とやがて産れる子供と三人で地道に暮すつもりやと北田はいい、そして、高峰、お前も温泉場の料理屋へ板場にはいり、給金を貯めて、せめて海岸通りに焼鳥屋の屋台を張る位の甲斐性者になれと意見してくれた。

【11-e】織田作之助「放浪」

その夜、千日前金刀比羅裏の第一三笠館で一泊二十銭の割部屋に寝て、朝眼が覚めると、あっと飛び起きたが、刑務所でないと分り、未だあといくらでも眠れると思えばぞく／＼するほど嬉しく、別府通いの汽船の窓でちらり見かわす顔と顔……と別府音頭を口ずさんだ。二十銭宿の定りで、朝九時になると蒲団をあげて泊り客を追い出す。九時に宿を出て十一銭の朝飯をたべ、電車で田蓑橋まで行った。橋を渡るのももどかしく、阪大病院へかけつけると、浜子はいなかった。結婚したときかされ、外来患者用のベンチに腰を下ろしたまゝ、暫くは動けなかった。今日は無心ではない、たゞ顔を一目見たかっただけやと呟き呟きして玉江橋まで歩いて行った。橋の上から川の流れていると、何の生き甲斐もない情けない気持がした。ふと懐ろの金を想い出し、そうや、未だ使える金があるんやつたと、紙袋を取り出し、永い間掛っ

て勘定してみると、六円五十二銭あった。何に使おうかと思案した。良い思案も泛ばぬので、もう一度勘定してみることにし、紙袋を懐ろから取り出した途端、あっ！ 川へ落して了った。眼先が真っ暗になったような気持の中で、たゞ一筋、交番へ届けるという希望があった。歩き出して、紙袋をすべり落した右の手をながめた。醜い体の中でその手だけが血色もよく肉も盛り上って、板場の修業に冴えた美しさだった。そうや、この手がある内は、わいは食べて行けるんやっとな気がついて、蒼い顔がかすかに紅みを帯びた。交番へ行く道に迷うて、立止った途端、ふと方角を失い、頭の中がじーんと熱っぽく鳴った。

【12】岸田國士「述懐」

十六の時、幼年学校在学中、軍医から肺炎カタルの宣告を受けて三月ばかり入院したことがあり、十八歳の時、士官候補生として九州の連隊で勤務中、同じ病名で二月あまり別府の療養所へ送られたことがある。そして、任官後、その病歴が役に立つて、軍籍を離れることができたのである。

【13】柳田國男「木綿以前の事」

楮こうぞは今日でも林木りんぼくと畠作物はたさくもつとの中間の、いわば半栽培品の状態にあるが、以前も苑地えんちに栽うえるまでの必要はなくても、やはり自由に採取のできるほど山野に充満してはいなかったために、その生産地は多少これを注意し且つ保護していたらしく思われる。下総の結城を筆頭にして、ユフの産地を意味する地名は、国の東西に分布している。たとえば大分県の別府温泉の西に聳そびえ立たった由布岳ゆふだけは、『豊後風土記』の逸文にも、ユフの採取地である故にこの名が付いたと記している。今日の村の名または大字おおあざの名に、湯本ゆもと・由ゆノ木等きの非常に多いのも、以前はユフの採取地として保護していた山野が、後に麻の畠作が進むとともに不用になり、開いて普通の村落田園としたことを意味するので、近くは武蔵むさしの一国だけでも、自分はその十数カ所を列挙すること

ができる。しかも是が東北の方へ行くほど少なくなるのは、やはりまた気候の制限があって、夙^{はつ}くからフヂやマダヤイラ草の類を、是に代用した結果ではないかと考える。

【14-a】北大路魯山人「河豚食わぬ非常識」

下関人の話によれば下関、馬^ば関、広島、別府方面におけるふぐの商い高は年々六十万円を下らないと誇る。これを話半分にして三十万円のふぐが年々ひとの口に入るわけだ。

【14-b】北大路魯山人「河豚食わぬ非常識」

ふぐを料理する法といっても実はそうむずかしいものではない。生きてるふぐを条件としてただ肉中骨中の血液を点滴残さず去ることのみの仕事と解してよい。だが、なんだといって軽々に取り扱う気になる蛮勇は止めて貰^{もら}いたいが、それにはなにをおいてもまず下関、馬関、別府等、本場の専門的庖丁人によって作られたものを食うという常識を必要とする。

【15-a】濱田耕作「温泉雑記」

羅馬附近にはチヴオリへ行く道にパーニと稱する驛があり、今も臭い硫黄泉が出てゐることは、車中からも旅客が見る處である。こゝは古へはアクワアルプーレエと稱せられた處である。ナポリ附近フラグレイアの野は火山地帯であつて、此處に幾多の火山と温泉が連続して居ることは、地質學者も考古學者も將た觀光の風流人も先刻知り抜いてゐる處であるが、これは思ふに海水浴と共に、温泉によつて羅馬以來繁昌したもので、ポツオリからパイヤに至る沿道の海岸には、當代の別墅の遺址が累々として列つてゐる。就中「ネロ帝の浴場」と名づけられるものは、海に突出した丘陵に穿たれた洞窟で、中には非常に高温な湯の出る處がある。私は其の中に案内せられて息のつまる様な苦しみを覚え、少女がバケツに汲み出す熱湯に驚いたことである。別

府などなれば「何々地獄」とでも命名せらる可きものであらう。ポツオリの「セラベウム」には羅馬時代のコリント式の柱が立つて居り、其れに附著した貝殻によつて、嘗て十餘尺も深く海水中に没され、中世此の邊が二十尺程も土地が低下し、其後十六世紀頃から隆起し、今日では再び沈下しつゝ、ある面白い標本を見られることは、ライエル氏の唱道して以來有名なものである。

【15-b】濱田耕作「温泉雑記」

日本の温泉に私の這入つたのは、山形縣上の山温泉が抑も最初で、七歳の時である。隣家のT氏の家族に連れられて行つたと覚えてゐるが、會津屋と言ふ旅籠の廣い浴槽で泳ぎ廻つた嬉しさ。私の少年時代の追憶として、T氏の令息との友情と共に忘れ難いもの、随一である。會津屋の婆さんは、夙くの昔に世を去つたのであらうが、當時一歳下のN君は今や敏腕の外交官となつてゐる。伊豆の熱海から伊東、修善寺、湯ヶ島の温泉と廻り歩いたのは、大學時代の修學旅行であり、箱根、鹽原の温泉は中學の生徒を引率して行つたのが始めである。城の崎の温泉は應學寺を見に行つた時に始めて這入り、薩摩指宿の温泉は石器時代の遺跡を掘りに行つて經驗した。此の開門嶽麓の温泉は、定めし石器時代の人民も知つて居つたことであらうが、日本中で今日でもなほ石器時代の温泉と言ふ可き原始的の處である。加賀の山中や豊後の別府は、近年漸く足を踏み入れた。

【16-a】吉川英治「隨筆 新平家」

そのほか、小松重盛の子資盛が、都の内で、摂政基房の供人と「車あらしい」の大喧嘩をして、都から勘当され、しばらく、謹慎を命ぜられていた田舎も伊勢であつたし、関の近くの三日ノ城址も、平家一族がいた所で、伊勢と平氏の関係は、優に一課題になるほどである。けれど、ほくらの旅行予定では、ここはほんの振出しにすぎない。炬燵の上で、Oさんからスケジュールの説明をきくと、南伊勢をざっと一巡、紀州へ出て、史蹟行脚のやまは熊野三山から那智にあるらしい。そして京阪間を駈け巡り、屋島、壇ノ浦、別

府、下ノ関、巖島とあるき、終りは、音戸おんどの瀬戸の清盛塚という長旅行であるそうなる。

【16-b】吉川英治「随筆 新平家」

駅から汽車、勝浦で降りる。越の湯まで歩く。ここも災後の町、宵の雨とぬかるみをたどって、海のおいかを闇に嗅ぐ。ちょっと一渡り、小汽艇に乗り、旅館にはいる。ここは熱海、別府なみ。急に、都会人の遊樂地気分の中にまごまごする。

【16-c】吉川英治「随筆 新平家」

あすの史蹟巡礼には、マックラウド氏が案内するという。マ氏は、スコットランド系のボストン人だが、今は四国人でもあると自称する。それほど四国が好きですという。どうやら、ほくらの方がよほど旅人らしい。そこでOさんからあすのコースを聞く。——早朝に、市外西方五、六里の白峯へ行き、またひっ返して、高松から今度は反対な方向へ一走、屋島、壇ノ浦その他を歩き、夜の十一時に、別府行き“こがね丸”へ乗るという予定なる由、すこし、おどろく。

【16-d】吉川英治「随筆 新平家」

夜の十一時に、別府行きの“こがね丸”へ乗船の予定である。「うっかりすると、時間いっぱいですよ」と、Oさんは冷静に人をおどかす。

【16-e】吉川英治「随筆 新平家」

瀬戸内と別府の巻

【16-f】吉川英治「随筆 新平家」

食堂は、閑散だった。年の暮の別府行きらしい。船長と雑談。部屋へもどると、あとからボーイさんが型のごとく、画帖、色紙、硯箱を持参に及ぶ。

【16-g】吉川英治「随筆 新平家」

栈橋が近づく。別府だ。

甲板は旅客で埋まる。「来ている、来ている」と嘉治さんの送る微笑。栈橋の上も人で埋まっている。

午後一時。土を踏む。

西部出版支部長のHさん、編集課長のIさん、別府、大分支局長など、たいへん大勢のお出迎え。同勢ゾロゾロ白雲荘の別館へとゆく。

【16-h】吉川英治「随筆 新平家」

その時の旅行目的は、熊本を中心に、武蔵に関する史料蒐集にあったのだが、もっぱら郊外の日亭に沈酔して、二人で“木挽^{こひき}ぶし”ばかりを稽古していた。音痴のほくは落第、別府へ戻って、原稿に追われ出したのが、この家だった。いま奥に坐ってみると、その時のベルシャ絨毯が、まだそのまま敷いてある。ちょっと、撫でてみたい気もちになった。

【16-i】吉川英治「随筆 新平家」

Hさん、Iさん、支局の人々などの間で、さっそくスケジュールが検討され出す。これは、予定外だったらしい。杉本画伯が、出発前に、この別府出身の佐藤敬画伯から、「ぜひ田^{たしよ}染の石仏を見給え」とすすめられていたのだとある。ところが、例の精密スケジュールと来ているので、抜き差しならない。結局、石仏見参は、おあずけ。陽のあるうちにと、ハイヤー二台で、由布院へ向かう。

【16-j】吉川英治「随筆 新平家」

わずか十五分か二十分。もう、せせこましい湯の町は別府湾の海岸線を探さなければ見つからないほど、遠くの眼の下にかすんでいる。

【16-k】吉川英治「随筆 新平家」

別府をせせこましいといったが、それは、こっちのせいで、別府のせいで

ないことが、いまわかった。何度も来ている所だが、汽船から眺めても、町に泊っても、背後の山岳地帯が、こう奥深い廻廊へ通じているとは、知らなかった。観念的に、うしろは山と決めてしまっている旅客は、ほくだけではあるまい。事実、伽藍嶽とか、硫黄嶽や、由布嶽にしても、決してやさしくない山容ではある。

【16-l】吉川英治「随筆 新平家」

もし別府湾に上がった敗軍平家の一群があったら、山を越えて、この由布院へも入って来たろう。そして九重^{くじゅう}を経、五箇ノ庄^{ごかしょう}や椎葉^{しいば}方面などへ、分布して行ったにちがいない。あるいは、北九州へ逃げ上がった友軍や肉親のたれかれを探して、果てなくさまよい歩いたかもしれない。

【16-m】吉川英治「随筆 新平家」

大分大学の松本、半田、安河の諸教授、別府女子大の佐藤校長、図書館長の兼子氏、公民館の安部氏、郷土研究家の立川、福田の両氏。そのほかみんなで十六、七名もおられたろうか。

【16-n】吉川英治「随筆 新平家」

自然生態か、別府の夜はやはり別府の夜になってしまう。温泉地熱帯生理現象がやがてぼつぼつ酒間にわいてくる。西部出版支部長のHさんなど、この地帯の常住魚族としても恥じない風貌がある。鼻下の微髯をヒレ酒の露にぬらして、拈華^{ねんげ}微笑^{みしょう}的なふくみ笑^{あは}クボを大幅な顔にたたえるところ、たれかが「無尽会社の社長さん」と敬称したのをほくも初めはほんとしていた程である。また編集課長Iさんは、ほととぎす派の俳人ということだ。カメラ風土記の取材では、足跡九州四国にあまねしという脚歴をもっている。「西部圏内なら、掌をさすように知っていますよ、孫悟空みたいだね。だからあすからの東道役はこの人です」と、嘉治さんがいう。悟空子、顔を赤くして、はにかむ。

【16-o】吉川英治「随筆 新平家」

別府を十一時十分の列車、門司駅着、午後二時半ごろ。(門司・小倉あるきの巻)

【16-p】吉川英治「随筆 新平家」

十人あまり膝づめに詰め合う。こう狭いのも陸まじい。河豚は別府の比でないことももちろん。ヒゲツキ節は、本社が近すぎるせいかな、今夕はお休み。(門司・小倉あるきの巻)

【17】若山牧水「姉妹」

「兄さん。」

と不意に千代は聲かけて、

「蒸気船は大へん苦しいもんだつてが、……誰でも然うなんでせうか？」

「それは勿論人に由るサ、僕なんか一度もまだ酔つたことは無いが……」

云ひかけて、

「如何するのだ？」

「如何もせんけど……先日本村のお春さんが豊後の別府に行つてからそんなに手紙を寄越したから……」

と何か切りに思ひ乍ら云つて居る。

「別府に？ 入湯か？」

「イエ、機織の大きな店があつて、其處に……あの人は近頃やつと絹物が織れるやうになつたのだつたが……妾に時々習ひに来よりましたが……」

談話は切れ／＼\の上の空である。で、私は突込んだ。

「行くつもりかい、お前も！」

「イ、エ！」

と仰山に驚いて、

「どうして妾が行けますもんけえ！」

と、つとせき上げて來たと見えて見張つた瞳には既う涙が潮なみだして居る。

「ウム、大變なことになつたんだつてねえ、どうも……^ま嚙ぞ……厭やだらう！」

返事もせずに俯頭^{うつむ}いてゐる。派手な新しい浴衣の肩がしよんぼりとして云ひ知らず淋しく見ゆる。まだ幾分酒のせみが残つてゐると見えて、襟足のあたりから^{みみたが}耳朶などほんのりと染つてゐる。

【18-a】中里介山「大菩薩峠 めいろの巻」

そんなことまで心配してみたが、きょうこのごろ、風のたよりに聞くと、白骨の温泉では、どうか大菩薩峠の著者にもぜひ来て泊ってもらいたい、ここには四軒、宿屋があるから、一軒に一晩ずつ泊っても四晩泊れる——と、何かしらの好意を伝えてくれとか、くれるなとか、ことわりがあったそうである。してみれば、ハッコツの呼び名が宣伝になって、宿屋商売の上に行くらかの利き目が眼前に現われたものとも思われる。しかし、宣伝と、提灯が、どう間違つても、白骨の温泉が別府となり、熱海となる気づかいはあるまい。まして日本アルプスの名もまだ生れてはいないし、主脈の高山峻嶺ととも、伝説に似た二三の高僧連の遊錫^{ゆうしやく}のあとを記録にとどめているに過ぎないし、物を温むる湯場^{ゆば}も、空が冷えれば、人は逃げるように里に下る時とところなので、ある夜のすさびに、北原賢次が筆を取って、

白狼河北音書絶（白狼河北、^{いんしょ}音書絶えたり）

丹鳳城南秋夜長（丹鳳城南、^{しゅうや}秋夜長し）

と壁に書きなぐった文字そのものが、如実に時の寂寥^{せきりょう}と、人の無聊^{むりょう}とを、物語っているようであります。

【18-b】中里介山「大菩薩峠 めいろの巻」

その一方、道庵は土地の人を指図して、河原の砂の上に火をたいて、暖かくしておいて、その上に被害者を寝かせて、なお砂を火であぶらせて、その熱いのを、別府の浜の砂湯できるように、被害者の五体の上へ、眼と口だけを残して覆いかけました。

【19-a】 倉田百三「青春の息の痕」

私は、けれど、お絹さんとははかない別れをいたしました。彼女は患家先きに働きに行っていました。そして私は嚴重な叔母の家にいるので、女と外で会う機会などつくることはできそうにもありませんでした。もとより彼女は患家を去り私はあえて叔母の心を乱さすならば会えないことはありません。昔の私ならば何の苦もなくそうしたでしょう。けれど私らは交際の初めから「他人を愛しえないならば私らの愛は尊きものではない」と決めました。病人の看護と叔母の心の平和とを犠牲にして別れを惜しむことはよいとは思えませんでした。それで二人はただ二時間ほど患家さきから暇をもらってある旅館であいました。彼女はどんなに泣いたでしょう。そして別府までついて行くといいはりました。そして絶望的な様子をしては「これが一生の別れだ」と幾度も繰り返しました。私は彼女をなだめ心を静かにして人生の悲哀を耐え忍ぶこと、二人の将来は神の聖旨のままに任せ奉ること、もし神のみ心ならばいかに別れても必ず わせ給うこと、私らに最も今大切なることは聖旨を呼び起こす熱き力ある祈祷なることをねんごろに説きました。そしてあまり彼女のなげく時には、どうせどの女をも恋することができないのならば、この女と共棲しようかとも思いました。けれど私は神を畏れました。何の誓もいたしませんでした。二人がどうなるか、何の私たちにわかりましょう？ 私たちは神様の領分を侵してはなりません。

【19-b】 倉田百三「青春の息の痕」

汽車のなかは案じたる^{めまい}眩暈の^{ほっつき}発作も起こらず安らかに下関に着きました。その夜は貧しき従姉の家に一泊し、翌朝門司よる筑紫路となり二時間を経て別府に着きました。それから今の宿におちつくまではあわただしい不安な一週間を送りました。私は傷つける心を抱いて春のほしいままな温泉宿にあることは好みませんでした。それで妹にもたのんで別府の町から一里はなれた、鶴見山という残雪を頂いた山のふところにある観海寺温泉に行くことに決めました。^{みぞれ}霙の降るある朝私らは一台の車には荷物をのせて山に登りました。野原のようなところや、枯れ^{こだち}樹立ばかりの寒そうな林の中などを通りました。

そして峻しい坂路は車から下りて歩かなければなりませんでした。それは痔の痛む私にはたいへん困難でした。宿は静かなというよりも寂しい山の中腹に建てられ、遠くになしそうな海がひろがり、欄によれば平らかな広い裾野の緩かなスロープが眺められて、遠いかなしい感じのする景色でした。浴客は少なく浴槽は広くきよらかにて、私の心に適いました。

【19-c】 倉田百三「青春の息の痕」

東京の春はそんなにプレゼントなものではありませんまいね。休暇にはどうなさいますか、当地もこの数日は風がはげしくて不安な天候でしたが、今日は晴れやかな暖かなお天気でした。山を焚く煙が青い空に昇ってるの^んがたいへん爽やかな感じを与えます。この手紙は私のことばかり書きましたが、それは久しく無沙汰したので私の様子を知りたいとあなたがたが思っていて下さると考えたからでした。宿もきまり心もおちつきましたからこれからはたびたび便りいたします。絵葉書はけっしてよくできてるとは思いませんけれど別府の絵ですから送ります。「青と白」はまだ妹が読んでいますからいままし待って下さい。妹が読んでしまったら書留めで返送いたします。

(久保正夫氏宛 三月十九日。別府温泉より)

【19-d】 倉田百三「青春の息の痕」

私は心がおちつかなくて、あなたに永い永い間御無沙汰してしまいました。私はどうも別府に来てから以来、心に平静と安息とを感ずることができなくて、いつも心が動揺しています。この頃は気まぐれな天候にて、ちらと青空が見えたかと思えば、すぐに曇って雨となったり、風がひどく吹いてにわかにな寒くなったりいたしますので、いっそう心が静かになりません。あなたはこの頃は雨天続きにて、不安な心地で暮らしていらっしゃるのではなかろうかと思われま。桜もおおかた散ってしまって、柔らかな新緑の心地よく、眼にしむように感ぜられるまでの、あの悩ましい晩春の心地のなかに通学したり、読書したりして暮らしていらっしゃるのでしょう。あなたの静かな、ものを包みはぐくむような御生活や、たのしい音楽会などのおたよりは、い

つも私の淋しい生活になぐさめを送ります。そして私はいつもあなたたと朝夕往復のできるために上京して、郊外の静かなところに住んでいたいと思わないことはありません。私はもはや永くあなたと会いませんね。私はお懐かしく存じます。

【19-e】 倉田百三「青春の息の痕」

(久保謙氏宛 四月二十七日朝。別府より)

【19-f】 倉田百三「青春の息の痕」

あなたからのかずかずのやさしいすぐれた手紙や、小包み、雑誌などはみな残らずたしかに落手いたしています。そしてそのたびごとにあなたの熱い真心を深い感謝と、そしてときには涙をこぼしてのよろこびをもって受け取りました。あなたは私の長い沈黙にさぞさぞ物足りなくお感じなされたことでしょう。そしてあなたが私に何かシルドを作ってるのではなからうかとさえお考えなされましたと聞き私は胸を打たれました。私はもったいなく感じます。なにとぞ私を許して下さいまし。私は心が混乱しているためと発熱して少しく不快であったのと、来客をもてなすためなどでこのように永い御無沙汰をしてしまいました。私は心が乱れて手紙がかけないので、しばらく妹とも別れて二、三日淋しい山のなかの温泉へ行って心をまとめて手紙をかくつもりでした。そして出発しようとする時に、ひとりの従弟が訪ねて来たのでそのくわだては行なわれませんでした。今夕従弟は別府を去りました。そして雨のしとしと降る音を近頃になくしみじみした親しみのある心できくことのできるような気分が訪れました。私は従弟を波止場まで送って帰り妹と雨に煙る街のともしびを見ながらなつかしい淋しい話をいたしました。もう一週間すれば別府を去ることや、病院のことや、あなたたちのことや、ふる里の母のことなどを、そしてことに私のひとりの妹のこの頃の苦しい煩悶について二人は胸をいためつつ語りました。その後で私はあなたにしみじみと手紙の書ける心地に訪れられてこのように筆を執りましたのでございます。

【19-g】 倉田百三「青春の息の痕」

あなたは今頃は どうしていらっしゃるでしょう。おおかた読書していらっしゃるか、創作に いそいでいらっしゃるかでしょうと思われる。あなたの勤労には私は敬服のほかはありません。あなたはまれなる精力を持っていらっしゃるように思われます。「白い部屋の物語」でその一部分のうかがわるる永い永い小説はまだ五章が終わっただけと承りましたが、それができあがるのをたのしい、大きな期待を持って待っています。そのために多くの眠らぬ夜や、たれこめて日を拝せぬ幾月を働いたと聞きますね、どうぞたまぬ、まめやかな、^{きか}旺盛な表現の衝動をもって、深い、博い人性の善くなろうとするねがいを見失わずに、あなたの芸術的努力をつづけて下さいまし。私はほんとにあなたの未来に驚くべきものを期待しています。あなたの年若さであなたほどのタレントに達し得た人は、失礼ですけれどまれだろうとおもわれます。けれどねがわくば健康を大切にして下さい。必ず必ず私のように病身ものになって下さらぬようくれぐれもお頼みいたしておきます。あなたが母と子との間の愛の讚美として創ろうとなさる小説をも私はなつかしく親しき心地にて期待しています。「母たちと子たち」というのはまことに私の心に適う名でございます。母様へのあなたのやさしき奉仕のお心はあなたのいつものお手紙にてよく察せられ、私はまことに尊く思っています。この頃の多くのエゴイスチックなほしいままな、母にそむく子たちを思えば、浅ましく荒々しく感じられてなりません。何ゆえに近代の青年は、やさしいものの心を傷つけることを深い罪と感じなくなったのでしょうか。私はさまざまの荒々しき醜き出来事について聞かされます。母親の心、乙女の心などのたやすく傷つけられるのを見ると私はたまらなくなります。私もそれまであまり大切にもしなかった母をばこの後はなぐさめ、いとしんで仕えて行かねばならぬと思います。先日私は妹と一緒に撮った写真に、別府名産の竹細工の美しい籠を添えて妹と二人で手紙を出しました。私も妹も丈夫そうに写されていましたから、母はさぞ悦ぶことと思われます。

【19-h】 倉田百三「青春の息の痕」

ベラダンの「アッシジのフランシス」はまだ読みません。この人についてはこれまで私は何事も知りませんでした。フランシスのものは少しは読みました。私はこの聖者を取扱った戯曲を数日の内に読み始めましょう。ことにフランシスとクララとのことに注意をおいて読みましょうとおもいます。私の心の混乱するのはまったく神と性との問題についての悩みのためなのです。この頃私の魂はこの煩悶のために平静を乱しておちつくことができません。私のこのもだえは二週間ほど前にお絹さんが私をたずねて来てからますます強くなりました。お絹さんは突然私をたずねて来ました。そして五日ほど私たちと一緒に暮らしました。彼女はますますはげしく私を恋慕うようになりました。五日の間一緒にいても彼女ははればれとたのしく私たちと暮らしたというよりも、何となく悩ましげに苦しげに見えました。そして私と二人きりになるときは重苦しい、悩みの言葉を出しては不安のように見受けられました。彼女は苦しい都合を冒して広島を出ているので、ゆっくりしているわけにもゆかず、帰りたいと泣きながら舟に乗って別府を去りました。その日は波は静かでしたけれど空は曇って不安な天候でした。ハシケで汽船まで妹と一緒に見送りましたが、別れる時に妹の手を握って泣いていました。(彼女は感じやすく、じきに親くなる性質にて、妹をすぐに好きになり、いくらか崇拜するほどになりました) 私たちは埠頭に立って船の出るまで見送りました。私は船で人を送ったのは初めてでしたからか、たいへんかなしく感じました。そして彼女はしきりに船よいを気にしていたので、あの「青と白」の最初のシーンが思われてなりません。汽船の見えなくなってからも、彼女の髪の銀のかんざしの遠くに小さく光ってキラキラしていたのが眼に残って消えませんでした。

【19-i】 倉田百三「青春の息の痕」

私はこの月の末には別府を去ります。そしてあるいは妹と別れて私だけどこかの淋しいところに隠遁するかもしれません。思えば別府での生活は私にはまったく失敗でした。私は取乱した姿で人の前に出ないように、しばし私

の心をととのえるために二、三か月の間退隠させてほしい。私が入々を愛する用意をするためにしばらく暇を、愛する人々にこいいたいと思います。なにとぞ私が自らの安逸のために煩わしき世よりのがるるものと思っ下さいます。私はトマスより違つた気持ちで隠遁します。私は塵の巷ちり ちまたに兄弟たちと共生すべきものなれど、しばしの暇をこい求めるのです。あなたがもし呉にいらっしゃいますならば、おそらく私は呉より船にて七、八里ばかりの、ある瀬戸内海の小さな島にて、あなたとなつかしい握手をするようになるでございましょう。

【19-j】 倉田百三「青春の息の痕」

(久保正夫氏宛 五月二十三日。別府温泉より)

【19-k】 倉田百三「青春の息の痕」

私は一週間すれば別府を去つて、妹とも別れて、この夏はたぶん倉橋島の音戸という広島湾内の小島にて暮らすようになりましょう。私はそこでしばらく考えさしてもらつて、私の心を整えたいと存じます。夏には正夫さんと会えるかもしれないので、たいへん悦んでいます。秋からは上京します。そして久しぶりにあなたにもお目にかかれ、朝夕往復して生活を共にすることが出来ますならば、どんなに嬉しいことでしょう。ただ、私は秋までに何か恐ろしい運命が、私を訪れねばいいかと案じます。私はこの頃は二、三か月前のことは恐ろしくなりました。願わくば神様が私を守り下さいまして私にこのたのしき逢瀬あうせを恵み給わんことを祈ります。あなたも祈りつつ待つて下さいまし。私は小一里の道を歩行できるようになりました。また肺のほうはたいへんよくて、どの医師も心配しなくてもよろしいと申してくれます。痔は一生の持病として、今後しばしば煩わしき手術を受けねばならないことと覚悟しています。パウロが終世癒えなかつた眼病を、神の与え給ひし棘とげとして忍び受けたように、私も私の運命に甘え、自らに媚びる心を制するための神の賜物として甘受いたしましょう。私がもし、ほしいままな健康の消耗を生ずるとき行を避け、謙遜に生を守りますならば、そうたやすく倒れは

しますまい。私は病弱な貧しい素質ながら、私に残された領土をひらいて行きましょう。私は私の使命のために神に祈らずにはいられません。なにとぞ生涯私の善き友であってくださいまし。私も生涯あなたに背く気はございません。もし神のみ心ならば一緒に仕事をする時もありましょう。かく思う時、私は心の躍る心地もし、たのしき恐ろしき未来のために祈りの心が湧くを感じます。ああ、御一緒に天に昇りたいものでございますね。

(久保謙氏宛 五月二十五日。別府より)

【19-1】 倉田百三「青春の息の痕」

(久保正夫氏宛 六月二日。別府温泉より)

【19-m】 倉田百三「青春の息の痕」

この頃は静かな読書や、たのしい訪問などして、おちついて暮らしていらっしゃる由、安心いたします。東京へ参る日も近づきました。そしてその日を十月一日と心に定めながら、私のたびたびの不幸から生じて来た不安な心持ちから、私はそのときにはまた何かそれをさまたげるような出来事が起こりはしまいかと気になります。どうかそのような事のないように祈ります。艶子は九日の朝庄原を出立いたします。別府で親しくなったひとりの娘さんと尾道で乗りあわして東京まで一緒に行くことになりまして、好都合でございます。私は二十日ほどおくれて参ります。私は、少し都合があつて妹とは別れて住みます。妹は寮舎に、私はどこか郊外に下宿でもいたしましょう。まことにごめんです、どこか心あたりのところを探しておいて下さいませんか、けれどそれはついでの時です。また見あたらなければ見あたらなくてもいいです。散歩の時にでも少し気をつけておいて下さい。

【19-n】 倉田百三「青春の息の痕」

私の新しい家に着くと、お絹さん——これは別府の時から、妹を渴仰して居るのです——が、かいがいしく、いろいろと世話をして、荷物の世話などしてやりました。天香さんにも通知をして悦んでもらいました。これからしば

らく、京都で三人暮らすことになります。私の住所は、東山の麓ふもとに近い、田圃たなぼのなかの淋しいところにあります。父からもらう少しのお金で、三人貧しく、睦むつじく暮らすつもりです。お父上がお国から見えになるそうですね。その後で私のところへもいらしていただけるかもしれない由、もし、そうできたなら、私はどれほど悦よろこぶか知れません。正夫さんとは昨夏をああして二十日も一緒に暮らせましたけれど、あなたとは三年夏のなかばの日に、カフェで別れたきり、お目にかからないのですものね。まことにずっと昔の、昔のことのような気がいたします。

【19-o】 倉田百三「青春の息の痕」

病院時代の物語りや、別府の船の別れや、福山警察署の別れや、一燈園での再会や、さまざまのことを思い出す時に、私はお絹さんをあわれにあわれに、思います。そしてできるだけ愛そうと思います。

【19-p】 倉田百三「青春の息の痕」

ことに上州の山の中の小屋で私を思い出して下さって、あの深い孤独と、澄えいんだ叡智えいちとに輝いた便りを下さった時、また湖の畔ほとりの旅館からの静かな心をこめた手紙、また母上を東京に送って行かれて帰られた時の手紙など、感動と非常に親しいいきいきしたシンパシーとをもって拝見したのでした。あなたがそのようなも孝心深く、老いたる母上をなぐさめいたわりなされたことは、かつて別府にいた頃、あなたの手紙でよく知っている母上のことを思い出したりして、美しくそして称讃にみちた心で二人で旅しておられる様子などを心に描いたのでした。

【20】 吉川英治「折々の記」

なか／＼書かないのが、大佛次郎氏である。書いても、楷書で署名だけときめてある。その大佛氏が、自由を愛す、と小屏風の貼りませへいちど書いたのをおぼえてある。もう不幸な大戦争へ突入してゐた頃のことだ。別府の

料亭だつたとおもふ。その筆を、酔つて書いてゐるのではないなど見てみたこともおぼえてゐる。

【21】金史良「玄界灘密航」

その後私は北九州の或る高校に籍をおくようになったが、この地方の新聞には毎日のように朝鮮人密航団が発見されて^{あが}拳ったという記事がのる。それを読んでいく時は、何とも云えない複雑な感情に捉われた。沿岸の住民がとて訓練を得て監視するために、稀の場合でなければ成功しないのである。あつちには命がけの冒険上陸とも云えるが、こちらは又こちらで必死になって上陸させまいと目を光らせている。僅か八つの小学生が学校へ行く途中、密航団を見付けて駐在所に告発したので表彰されたというのでかでかした記事も稀ではなかった。それを読んでいると私は、自分までが来れない所へやって来て監視されているような、いやな気持ちになることがままあつた。そのためでもなかろうが、私は九州時代有明海にしても、鹿児島海岸にしても、別府の太平洋にしても随分親しんだものだが、目と鼻の先の玄海灘の海辺には余り遊びに出掛けなかつた。

【22】吉川英治「河豚」

別府に、冬を半月ほど暮していた間、晩になると河豚をたのしんだが、味もよし、女中のあしらいも綺麗事で、東京に近ごろ殖えたのとは比較にならない。白いキモと春菊の真つ青なのが焜炉の火のうえでコトコトと音立てている冬の夜ほど温かに囲まれたいという気のするものは他にない。

【23】萩原朔太郎「石段上りの街」

併し、田舎風の温泉でなくとも、塩原のやうな所はまた嫌ひである。ああした種類の風景は、もはや時代遅れの趣味に属するもので、近代の若い人に

は感興がない。どこか南画くさい、古い趣味の美文めいたあの辺の景色は、今日ではむしろ俗である。それにあすこの福和戸^{ふくわと}のやうながらんだうの温泉、普通の駅路の両側に家が並んだやうな温泉は、どこか埃くさい気がするのと、まとまりのない不安な気がするのと、とても落付いた気分になれない。温泉はやはり山の峡谷のやうな所に、そこだけで一廓をなしてゐなければいけない。その他まだ嫌ひな温泉の種類をあげればたくさんある。伊豆の伊東のやうな、海岸の温泉も嫌ひのものの一つである。すべて海岸の温泉には、温泉らしい情趣がすくない。普通の田舎町らしい——漁師町らしい——気分と、温泉町らしい特異の気分とが不調和に混同して、妙に落付きの悪い安価の印象をあたへる。それに場所も平地であるから、雲霧とか山霧とかいふ温泉特有の情趣がなく、すべて感じが乾燥して居る。尤も伊東は特別にくだらぬ温泉であるが、他の熱海でも別府でも、温泉らしくない点では、伊東と大同小異であらう。

【24】酒井嘉七「両面競牡丹」

「旅をいたしている間、私がお師匠、とお呼びするのも、何んだか人の気を引き易くて、変でございますし、私も、御隠居さまと呼ばれますと、何だか改まりまして、保養をする気がいたしませぬ。でこういたしましょう。私は、あなたを、娘か何かの様に、お千代と呼ぶことにいたしましょう。師匠は、私を——お母さん、では、余り芝居がかかる様でございますから、伯母さんと言って下さいませ。これでは不自然でなく、いいでございましょう」

と、かように申されたのでございます。汽船は、新しい「別府丸」でございました。中棧橋^{なかかさし}に着きますと、船は、もう横づけになっております。切符の用意はしてございましたので、私達はすぐ船に乗ったのでございます。ところが、船の入口で、御隠居さまは、お知り合いの方にお逢いになったのでございました。背広服を着た、いかめしい、お方で御座いました。御隠居さまは、丁寧^{ていねい}に御挨拶をなさいました。私も、軽く会釈をいたしました。お話を邪魔をするのは失礼と存じまして、少し離れて立っておりました。男の

方のお声は少しも聞きとれませんでした。御隠居さまの、
「……しばらく、別府で保養をいたしたいと存じます。千代もつれまして」

【25-a】長谷川時雨「柳原燐子（白蓮）」

「別府にはさまの御別荘がおありですから、それはよろしう御座いますの。随分前から御一緒に行くお約束になっていて、やっと参りましたのよ。伊藤さんがお迎えながらいらっしゃるはずでしたところ、風邪をおひきになったって電報が来たものですから、さまは急いでお帰りになりましたの。だから残念でしたわ。」

【25-b】長谷川時雨「柳原燐子（白蓮）」

「忘れがたき別府の一夜」の題下には、大正八年一月末に（『踏絵』）が出てから数えて三年目湯の町の別府に、宮崎氏が白蓮さんをたずねた。その後『解放』の同人たちに噂が高く、春秋の上京に、散歩、観劇などを共にしていたとある。

【26-a】宮本百合子「日記 一九二六年（大正十五年・昭和元年）」

五月一日（土曜）

紅丸にて神戸から午後四時立つ。

別府行。

【26-b】宮本百合子「日記 一九二六年（大正十五年・昭和元年）」

五月二日（日曜）

別府着。

【27】内田魯庵「研友社の勃興と道程——尾崎紅葉——」

甘ったるい恋物語で食もたれしている処へ三唾の人を茶にする三馬式の軽い滑稽は餅菓子^{しおせんべい}のあとへ塩煎餅を出したようなもので、三唾の処女作はかなりに受けた。この初陣の功名に乗じて続いて硯友社の諸豪と轡^{くつわ}を駢^{なら}べて二作三作と発表したなら三唾もまた必ず相当の名を成して操觚^{そうこ}の位置を固めたであろうが、性来の狷介と懶惰とズボラとが文壇にも累をなし、その上に硯友社からは新参者として外様^{とぎさま}扱いされ、紅葉にも余り気に入らないで引立てられなかった。最後が岡山の山陽新報社に口があったを幸いに落延びて、馬骨と改名して田舎新聞に隠れたが、一時馬骨の名が岡山に振ったほど地方新聞小説家としてはかなり幅^あを利かした。が、持って生れた狷介と懶惰とズボラとは爰^{こゝ}でも永續^{ながつづ}きがしないで、折角数年の辛抱で築き上げた地方新聞社の位置をも些^ち細な失敗^しで棄^すてるべく余儀なくされた。それから後は阪神附近をアチコチと流離^{りゅうり}していたが、ドコにも容れられないでとうとう九州に渡って別府^{べつぷ}に遁息^{ひっそく}し、生活に勞^つれた病軀^{びようく}を抱^かえて淋しく暮した。再び上京したらと元気を付けてやった事もあったが、盛返^{もんもん}す勇氣もなくして悶々^{もんもん}数年の後、終に大正四年の初冬に別府の同情深い友の家で淋しい敗残者の生涯を終った。三唾は『石倉新五左衛門』一冊の外には中央文壇に何の足跡をも残さないで今では殆んど忘れているが、また明治の数奇伝中の薄倖なる奇才であった。

【28】岸田國士「明日は天気（二場）」

夫　もうわかつた。おれはこれから、旅行して来る。
妻　何処へいらつしやるの。
夫　気の向いた処、日本国中だ。
妻　……。
夫　一つ、別府あたりへ行つてみるかな。
妻　旅行案内だけでもつてね。
夫　勿論……。これほど金のかからない旅はない。旅行案内といふものは妙なものだね。汽車の時間を順々に見て行くと、からだも一緒に動いて行く

やうな気がする。一種の錯覚かも知れんが、こいつを応用して、何か一つ、どえらい発見でもしてかすかな。

妻 ……。

【29】佐藤垢石「葵原夫人の鯛釣」

また、鮪や鮭は関東から取り寄せる必要のない程に瀬戸内海から漁れる魚は豊富であったのである。鯛も、その通りであった。旧の三月、桜時となれば生きのいい鯛が、浪速から尾道、広島、下関、別府の浜々へ山と積まれた。そして、料理も発達していた。清新な鯛の肉を舌に載せては、鮪や鮭は下肴と言うより外はない。それは、上流の家庭ばかりではない、昔から農家でさえも春になれば鯛の味に親しんだ。

【30】宮本百合子「石油の都バクーへ」

そこを過て、帝政時代から建っているひどい労働者住宅の間を抜け、段々上り坂の道を自動車は速力を落して進んだ。黒石油だけが湧き出す油田というのを見た。主として重油、機械油、リグロイン(?)等を精製するのだそうであるが、その露天泉を眺めた時、自分は別府温泉の地獄まわりで坊主地獄と云ったか、それを思い出した。黒石油は重く、泥が煮えるように湧き立っているのである。

【31】佐藤垢石「海豚と河豚」

それから、雄河豚の辜丸が素敵に珍味だ。白子と言ってちり鍋によく、味噌汁にいい。河豚ざらいの尾崎行雄老が先年別府で、この白子を豆腐であると言って食わされ、その珍味に感嘆して次の旅行先下関で、あの丸い輪切りの豆腐を出せと言って請求したところ、それは河豚の辜丸であろうという説明を聞き、胆を冷やしたことがある。

【32】柳宗悦「手仕事の日本」

九州は暖い地方とて竹に恵まれます。細工は各地で多かれ少かれ見られますが、特に名を高めたのは別府の仕事であります。そこに行きますと、如何に様々なものが竹で作られているかを見られるでしょう。もとより籠かごや炭すすはその筆頭をなすものでありますが、仕事が盛なだけに、組方くみかたに、色附いろつけに、形に様々な工夫を凝こらします。竹細工の技わざではおそらく別府が最も進んでいるかと思われまゝ。しかしそれだけにここの仕事には危険が多く、技わざの末すえに陥おちって、特に花籠はなかごの如きはいやらしいものさえ少くありません。こういうものを見ると、単純に用途のために出来る雑具の方に強みのあるのを感じます。日向ひょうがの高千穂地方に「かるひ」と称する竹籠かごがありますが、山に行く時よくこれを背負せおいます。「かるひ」とは方言で担になう意の由であります。この背負籠せおかごの作り方などは、全く竹の性質をよく活かしたもので、別府あたりの品がとかく造作に過ぎて竹の性質を殺しているのとは、大変な違いであります。「かるひ」の如きは誰も注意しませんが、九州で出来る竹細工としては第一流の列に入るものでありましよう。主な分布区域は宮崎県から熊本県にわたる県境ぎまいであります。また大分県の水郷みづこう日田町ひたに近い大鶴村おおつるで竹製の飯櫃いひを作ります。珍らしい品といえましよう。

【33-a】神西清「地獄」

その異様な臭ひは、彼にとつてももちろん今日はじめて嗅ぐ臭ひではない。祖母の火葬へは恐らく連れて行かれなかつただらうが、父の時のことはよく覚えてゐる。別府の病院の、きたならしい畳の上で死んだ父は、曇つた秋の朝、ひと気のない砂丘のかげで焼かれた。火葬場などいつたものではなく、庭にわで囲いつた小さな掘立小屋であつた。その夕方、長々と斜陽のさす田圃でんぼみちを、俵はたけに揺られて骨拾ひに行つた。砂丘のかげの小屋には、母と子と、それに中年の隠亡かくむしと、そのほかに誰もゐなかつた。いやもう一つ、ふしぎに崩れずに残つた父の髑髏どくろがあつた。その髑髏どくろを隠亡かくむしが、長い火箸のさきで突き崩した。そのとき風が立つて、小屋の庭にわ囲いひのなかから、かすかな異臭を運

できた。父の残り香である。

【33-b】神西清「地獄」

院に手入れをして、児玉一家は引移つた。少年も一度泊りに行つたことがある。当てがはれた部屋は二階の病室の一つであつた。恐らくまだ誰も寝たことのない、ましてや誰も死んだことのないその部屋は、畳だけが妙に赤ちやけて、少年に遠い昔の別府の病院を思ひ出させた。台湾赤痢といふ腸にポツポツ穴のあく病気で、痩せこけて死んでいつた父の顔や脛を思ひださせた。

【34】坂口安吾「安吾巷談 熱海復興」

今度温泉都市法案とかなんとかいうものが生れて、熱海と伊東と別府、三つの温泉都市を選び、国家の力で設備を施して、日本の代表的な遊樂中心都市に仕立てるといふ。これについては、住民の投票をもとめ、半数以上の賛成によって定めるのだそうだ。

【35】織田作之助「競馬」

その競走^{レース}は七番の本命の馬があっけなく楽勝した。そしてそれが淀の最終競走^{レース}であった。寺田は何か後味が悪く、やがて競馬が小倉に移ると、1の番号をもう一度追いたい気持にかられて九州へ発った。汽車の中で小倉の宿は満員らしいと聴いたので、別府^{べつぷ}の温泉宿^{とま}に泊り、そこから毎朝一番の汽車で小倉通いをすることにした。夜、宿へつくるとくたくたに疲れていたので、寺田は女中にアルコールを貰ってメタボリンを注射した。一代が死んだ当座寺田は一代の想い出と嫉妬^{ねや}に悩まされて、眠れぬ夜が続いた。ある夜ふとロンパンの使い残りがあつたことを思い出した。寺田は不眠の辛^{つら}さに堪えかねて、ついぞ注射をしたことのない自分の腕へこわごわロンパンを打つてみると、簡単に眠れた。が、眠れたことより、あれほど怖れていた注射が自分で出来て、しかも針の痛さも案外すくなかつたことの方がうれしく、その後脚気^{かっけ}になつ

た時もメタボリンを打って自分で癒^{なお}してしまった。そしてそれからは注射がもう趣味^{しゅみ}同然^{どうぜん}になって、注射液^{しゅうしやく}を買い漁^{あさ}る金だけは不思議に惜しいと思わず、寺田^{かばん}の鞆^{しろうと}の中には素人にはめずらしい位さまざまなアンプルがはいっていたのだ。注射が済んで浴室へ行った時、寺田はおやつと思った。淀で見たジャンパーの男^{おとこ}が湯槽^{ゆぶね}に浸^{つか}っているではないか。やあと寄って行くと、向うでも気づいて、よう、来ましたね、小倉へ……と起そうとしたその背中を見た途端、寺田は思わず眼^めを腫^はった。女の肌のように白い背中には、一^{いち}という字^{いれずみ}の刺青^{はりぞう}が施^{ほどこ}されているのだ。—— 1 —— 一代。もしかしたらこの男がああ「競馬の男」ではないか、一の字の刺青は一代の名の一字を取ったのではないかと、とっさ^{とっき}の想いに寺田は蒼ざめて、その刺青は……ともうたしなみも忘れていた。これですかと男はいやな顔もせず笑って、こりゃ僕の荷物ですよ、「胸に一物、背中に荷物」というが、僕の荷物は背中に一文字でね。十七の年からもう二十年背負っているが、これで案外重荷でねと、冗談口の達者な男だった。十七の歳から……？ と驚くと、僕も中学校へ三年まで行った男だが……と語りだしたのは、こうだった。

【36】吉川英治「夕顔の門」

【では、その怪我人のお方を】

【別府^{べつふ}の温泉^{りやうじ}まで、療治^{りやうじ}にお連れするんです】

【37-a】古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和十四年」

十二月二十二日（金曜）

博多——別府。

博多の水野旅館の朝である、朝食はコーヒーとトーストだけ、宿を出て、坂本・里見と共に、後藤といふ博多織を売る店へ行き、母上と道子に博多帯など買ふ、土産など買ったことがないが、さて買ってみるといゝ心持なり。宿へ神保他劇場主連が迎へに来り、博多名物新三浦の水焚きを食べに行く、

水たきといふものあまりうまいとは思はぬが結構三四人前食ひ、その上鳥の天ぶらを食べた。三時五十分の汽車で、博多発、小倉乗かへの別府行き、九時すぎ別府着、成天閣旅館へ、これは二流らしい、でもいゝ部屋、海が近い、波の音さら／＼ときこえる。

【37-b】古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和十四年」

十二月二十三日（土曜）

別府。

別府成天閣の朝、朝食、卵かけて三杯。地獄めぐりに出かける、十年前の地獄より俗になり、鱒のある地獄などは可笑的。一時十何分は大分へ行く、大分喜楽館わりに入ってるし、客もピン／＼来る。別府へ帰り、松栄館でやる、こゝも入りよし。急にたのまれて、陸軍病院の療養所へ慰問に行き、快く笑はせると又別府の町へ、長崎の館主広石氏わざ／＼此処迄来て、東洋軒といふ支那料理でたっぷり馳走になり、大分・別府を各一回やり、宿へ帰る。

今朝、別府と大分は各三回だと言はれて、ムクレたが、交渉の結果、広石氏といふ人は腹が大きく、よろしい二回でいゝと言はれ、助かったわけ。

【37-c】古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和十四年」

十二月二十四日（日曜）

帰京の途。

今朝は七時だ、成天閣の食事は、悪すぎる。八時何分別府発、門司行。門司から連絡船で下関へ。十二時五十分発、二・三等急行。二等寝台も、あまり混まない時は助かる、一人でのびて寝てゐられるから。朝鮮から帰りの柚木与市も同車、食堂車へ行き（此の食堂車、サービス女ども誠に気持悪し）夕刻となると、六時半といふにバタ／＼と寝台の支度をされてしまひ、さあ寝ろ／＼と言はんばかり、まさか今からねられもしない、喫煙室で話をし、弁当を食べ、神戸をすぎてアダリンをのみ、寝台へ入る。いゝあんばいにスチームも統制で、いゝころ加減なり。

【38】神西清「少年」

やがて母と少年とは、冬の海を基隆^{キールン}から下関へ、おなじ信濃丸に乗つて航海した。一年半まへの往路では四人だつたのが、帰り路では二人だつた。父は病気の経過が思はしくないので、内地の医者にかかるため、一足さきに帰国して、とりあへず別府の温泉で静養してみたのである。とつぜん絶望的な電報が来て、母をおどろかせた。母は少年には何も言はずに、黙つて家財道具の一切を整理して、少年を連れて船に乗つたのである。

海は往路に引きかへて、しごく穏かだつた。母はそのあひだ、三晩つづけて同じ夢を見た。父が帷子^{かたびら}に黒い絹の羽織を着て、向うむきに坐つて何か書類の整理をしてゐるところである。この夢はよく当つた。母と少年が別府に着いて三日目に、父はうそ寒い病院の二階の一室で、骨と皮になつて死んだのである。

【39】夢野久作「名娼満月」

千六はそれから仲間に別れて筑前の武蔵^{むさし}、別府、道後と温泉まわりを初めた。たとい金丸長者の死に損いが、如何に躍起となつたにしたところが、とても大阪三輪鶴の千両箱を三十も一所^{いっしょ}に積みは得せまい。その上に銀之丞殿の蓄えまで投げ出したらば、松本楼の屋台骨を引抜くくらい何でもあるまい。もし又、万一、それでも満月が自分を嫌うならば、銀之丞様に加勢して、満月を金縛りにして銀之丞様に差出しても惜しい事はない。去年三月十五日の怨恨^{うらみ}さえ晴らせば……男の意地というものが、決してオモチャにならぬ事が、思い上がった売女^{ばいた}めに解かりさえすれば、ほかに思いおく事はない。おのれやれ万一思い通りになつたらば、三日と傍へは寄せ附けずに、天の橋立^{あか}の赤前垂^{まゑだれ}にでもタタキ売って、生恥^{いきはじ}を晒^{さら}させてくれようものを……という大阪町人に似合わぬズッパリとした決心を最初からきめていたのであった。

【40】柳田國男「日本の伝説」

驚きの清水というのは、普通の池や泉とちがって、人のような感覚をもった活きた水ということであったようです。豊後土記という千年あまりも前の書物にも、そんな話が書いてあります。たぶん今の別府の温泉の近くでありましょうが、玖倍利湯の井という温泉は、いつも黒い泥が一ぱいになって湯は流れないが、人がこっそりと湯口の傍に近寄り、ふいに大きな声を出して何かいうと、驚き鳴って二丈あまりも湧きあがるといっているのです。それが後になると念仏の話ばかり多くなったのは、つまり念仏が非常にはやったからであると思います。この国でも田野の千町牟田には、朝日長者の屋敷跡というところがあって、そこには念仏水という小さな池がありました。人がその岸に立って南無阿弥陀仏を唱え、水もこれに応じて泡を立て、ぶつぶつといったという話が残っています。(豊薩軍記。大分県玖珠郡飯田村田野)

【41-a】小出楯重「大切な雰囲気」

とにかくエンジンの動く甲板へ立ちさえすれば、われわれが幾枚かの絵を塗りつぶしている間に歐洲航路の船長は、甲板という地上の断片に乗って印度洋を何回か往復するのである。とって用もないのに船長の如く地球を走って見てもつまらないけれども、私は夏における汽船進行の形を見ると誘惑される事甚だしいものがある。せめて別府行きべつぷの紅丸でもいいから、それに乗ってあのペンキにの匂いを嗅ぎ廻かって見たいと思う。鼻から彼南ベナン、印度洋、マルセイユが蘇よみがえってくるのだ。

【41-b】小出楯重「大切な雰囲気」

あす着港というので今日は大分ソーシャルルームで手紙をかいている人が多い。

おかアさんはもう別府から帰ったかしらん、神経を起さぬ様にせんといかん、ちっとも心配な事はないから。

暑さも、日本より反って涼しい。昨夜も船のデッキで、かぜを引く程に
ずしかった。

考えて見ると、別府へ行った日が一番暑かった様に思う。

香港、シンガポール間が暑いそうだが、それから印度洋は又らくだそうな。

〔注記：手紙の一節〕

【42】長塚節「長塚節歌集 下」

十八日、きのふ別府の港につきてけふは大分の郊外に石佛を探り汗ながし
てかへれるに、夕近くなりて慌しく肌衣とりいだす

こゝろよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり

【43-a】海野十三「蠅男」

それから藤三親分は、帆村にいろいろと仲間の習慣の話や、縄ばりのこと、
持ち場などについて、こまごました注意を与えたのち、

「さあ、これは今夜の、わしからの引出物や。これを一枚、お前にやる」

と云って、一枚の紙札をくれた。

帆村が何だろうと思ってみると、それは新別府温泉プールと書いた一枚の
入浴券であった。

【43-b】海野十三「蠅男」

帆村にとっては、甚だ迷惑なことであった。そんなことよりも、早く蠅男
の所在を探りたいのだった。だが親分さまからの折角の下され物である。行
かねば、後の崇^{なた}りの恐ろしさも考えねばならない。やむなく帆村は、その新
別府温泉プールなるものに、楢平とともにでかける決心をした。

【43-c】海野十三「蠅男」

楢平と帆村とは、^{おそ}恐る^{おそ}恐るその新別府温泉プールの入口へ切符を出してみた。

【43-d】海野十三「蠅男」

「どこが新別府なんだろう。プールは別に別府らしくも何ともないじゃないか」

と帆村がいうと、楢平は指をさして、

「新別府ちゅうのは、この奥にある砂風呂のことや。そのわりに流行ってえへんけれどなあ。よかったら行ってみなはれ。ええ女子がおって、あんじょう砂をかけてくれるがな」といった。

帆村は妙な気になった。

今夜からいよいよ死闘だと覚悟していたのに、それがこんな風に^{のんき}呑気に浴場に入って汗を流せるなんて、夢のような話ではないか。

しかし実をいえば、帆村もまた大阪人に負けぬくらい風呂好きであった。別府式の砂風呂と聞いては、もうじっとしていられなかった。楢平をプールに残しておいて、彼はその砂風呂のある別館の方へ手拭片手にノコノコと歩いていった。

なるほど別館建てのこの砂風呂は、思ったよりお粗末だが、ともかくも別府を模倣して、およそ二十畳敷くらいの一室全部を綺麗な砂で充たしてあった。そして、中には湯気がモヤモヤとたれこめていて、電灯がほの暗かった。

【44】柳田國男「こども風土記」

次には指の数を問う文句であるが、これにはことに面白い変化がある。全体に鹿・鹿・角・何本とくぎって、はっきりと言う者が少なく、九州などは、

しか／＼何本

またはシカナンボというのが普通で、それが鹿だということを今始めて気づいたという人も多かった。鹿の角を明らかに言っているのは、九州では博多と京都郡とただ二カ所だけで、その他はシタシタ何本いと謂ったり、またはチカチカ何本という者が方々にある。広島市などでは、

チケチケワンボ

とさえ謂っている。紀州の日高郡でもチカチカこれ何本、京都ではまた、

ベスベスこれ何本

つまり鹿の遊びだということはもう忘れていたのである。

愛媛県の方に来ると、鹿の角何本というのがまだところどころ処々に残っているが、一方には色々の言いかえが始まり、それも九州ほどには統一していない。最も簡単な、しかしかなんぼ以外に、たとえば、

しかいちなんぼ（喜多）

しかんちょなんぼん（松山市等）

しかしかなんちょう（温泉）

しかやんなんぼ（越智）

しか／＼しかの年なんぼ

その他の珍しい変化が現われている。是は運動これの間拍子まびょうしとも考え合せて見るべきものであろうが、とにかく意味もわからぬ語なが永く伝わるには、別にそれぞれの理由が隠れて存するものと見てよい。注意すべき点はお幾つかあるが、九州でも大分郡と別府の町とだけに、

レイボン何本

と言ってきく例がある。是は下の児の答えが当らなかつた場合に、それを打消して「三本！ 何本」と畳みかけて問う言葉ともみられるが、一本も出さずに握り拳で出すことを、零本れいぼんというのは少し出来過ぎている。ところが遠く離れて滋賀県の犬上郡でも、同じ遊びは背の上から指を立てて、

レイボン、鹿の角何本、鹿の足何本

というのがあって、土地の人は零本と解しているようだが、是などは問いの始めだからことに妙に聞える。何か原因のまだ捉えられぬものが有るのではないか。小さなことのようにだが手掛りはこんなところに潜んでいると思う。

【45】 夢野久作「あやかしの鼓」

大阪から別府、博多、長崎、そのほか名ある津々浦々を飲んで酔いは酔い、酔うては女を探してまわった。昨夜鶴原未亡人に丸うつしと思ったのが、あく朝は似ても似つかぬ顔になっていたこともあった。その時私は潜々と泣き出して女に笑われた。

【46】 賀川豊彦「空中征服」

彼は二畳敷の病床に竜宮の夢を見、日本アルプスの幻を画いている。否、彼は二畳敷を御殿の大広間のごとく考えて、室内旅行の夢を見ていたのである。

北の隅が松島で、南の隅が別府、東が中禅寺湖で、西は瀬戸内海の因の島付近である。

彼は寝ながら、頭の中で松島から因の島まで船で旅行もすれば、別府から中禅寺湖まで汽車旅行もする。

【47】 牧野富太郎「植物一日一題」

元禄七年（1694）にできた貝原益軒の『豊国紀行』に「別府のあたりには家の棟に芝を置いて一八と云花草をうえて風の棟を破るを防ぐ武蔵国にあるが如し、風烈しき故と云家毎に皆かくの如し」と書いてある。この紀行文は豊後別府の人森平太郎氏が昭和十四年に発行した『大分県紀行文集』に収録されているが、この紀行文へ対して後に入れた頭注を書いた福田紫城氏の文に「蔦尾草也、大正震災前まで、東海道線平塚駅付近及び箱根山中の農家に於て、福田はしばしばこの風俗を目撃せり、別府に於ても明治十年頃までは、この古風俗を存したりと云ふ」と出ている。また益軒の『大和本草』にも紫羅傘〔傘は棟の誤り〕すなわちイチハツの条下に「民家茅屋の棟ニイチハツヲウヘテ大風ノ防ギトス風イラカヲ不破」と書いてある。

【48】 夢野久作「東京人の墜落時代」

九州で東京風の流行の真先に這入って来る処は福岡で、その次が大分県の別府だそうである。

それかあらぬか、記者が東京の職業婦人の新スタイルを見て仰天して帰って来て見ると、こはいかん、ツイ一ヶ月ばかり前まで気ぶりも見えなかった福岡の淑女令夫人達が、堂々とその風を輸入して、得意然と大道を練り歩いて御座る。別府には行って見ないからわからぬが、これは流行っているにしても、福岡のように土着の人がやっているのではあるまいから、さまで驚くにも及ばぬであろう。

【49】 柳田國男「野草雜記・野鳥雜記」

私などの幼ない頃には石菖せきしょうという草の穂を取って、これをつっぱりにして目を張り、よってまたこの植物をメハジキといていた。大分別府の近くではメツパリとも呼んでいる。何でもないことだがこれで目まばたきをせぬようになると、ちょっと変わった顔に見えるのを興じたのである。

【50】北原白秋「夢殿」

終篇

二十四日、我空を飛びて大阪へ向ふあひだ、妻は子らを伴ひて、太刀洗より大分なる生家へ下る。我、行を了るや、その翌の日、紅丸に乗じて、そを迎ふと航海す。かくして、別府、大分、由布院に淹留旬日、再び妻子と瀬戸の内海を渡りて帰る。その折の長歌竝に短歌二三。

大分にて

白雉城お濠の蓮のほの紅に朝眼よろしも妻がふるさと

母びと

母びとはかなしかるかな。老いましてなほとやさしな。妻と来て、お許に来て、今日くつろぐと、子らもゐて。茶寮には灯のはひり、石いくつ水うつあひだ、彼方見て、もの言ひてます物ごしのあはれ、よくぞ似る妻が母刀自、子らにもけだし。

反歌

水うちて残んの日かげ濡れたるにも言ひてます母のしたしさ

おなじく

街中は瓦重なる夕かけをまだじじとある蟬が庭木に

瀬戸内海

しづかや船ゆきゆく。安らや船ゆきゆく。飛ぶべくはその空飛びぬ。ひさびさや会ふべく会ひぬ。子らにしも父が母國、まつぶさに見よとし見せぬ。さて見むと、母の里をも、子ら見よと隈なく行きぬ。淡路嶋かよふ千鳥、明石の浦、このそよぐすずしき風に、親子づれ帰さ安しと、この日なか、波折

光ると、甲板かふはんに鼠出でぬと、おもしろとその影見やる。

反歌

昨きの飛びて空ゆながめし瀬戸の海を今日船路ふなぢ行き波の面もわたる

空ゆ見し全またき淡路の夕がすみ船はすべなもただに片附く

あとのたより

君が飛ぶことごとくの人ひとが仰あやぎぬと涙せりとぞ友ら言ふかも

その空は涙たまりて見ざりきと下べのその家いへ我も見ざりき

【51】種田山頭火「行乞記」

十二月三日 晴、一日対座懇談、次郎居滞在。

今日は第四十八回目の誕生日だつた、去年は別府附近で自祝したが、今年
は次郎さんが鯛を買つて酒を出して下さつた、何と有難い因縁ではないか。

【52】平野萬里「晶子鑑賞」

旅寝する人のささやき雨の声潮の響き噴泉の音

昔の別府、亀の井旅館の雨の夜のシンフォニーである。折から十一月の海
が荒れて潮の響きさへ遠く聞こえたものらしい。旅寝する人のささやきは同
行四人の自分らのささやきであらう。

君と在る紅丸の甲板も須磨も明石も薄雪ぞ降る

その帰途、紅丸が明石の門にかかつた時雪が降り出した。よい時によい雪が降り出したものだど歎息したい位だ。もしこの時雪が降らなかつたらこの歌は出来なかつたであらう。為に日本文学は一つの大きな損失を来す所であつた。その位この歌の値打ちを私は高く評価するものである。晶子歌が何程勝れたものであらうと、神品といふべきものだけを拾つたらさう沢山ある筈はない。その第一はこの歌でないかと私は思つてゐる。再びナチカミリタリズムの世になつて晶子歌が全部亡ぼされる日が来たら、私はこの一首だけを石に彫して地に埋めるであらう。私は幾度か別府通ひの船に乗つた、紅丸にも二度乗つた。その度に甲板に立つてこの歌を朗誦する私を内海の鷗は聞きあきたことであらう。

[53] 古川緑波「古川ロッパ昭和日記 昭和十五年」

十月二十六日（土曜）

八時ときいて、すっかり窓を開けさせる。昼間ちつとしてるのだから夜は寝るのが辛い。口を洗ひ、顔を拭く。別府へ行かうかと考へる。汽船の往復が楽しいだらう。午前の回診、ずん／＼快方の由。母上は新大阪泊り、毎朝、こっちへ出勤。女房、森田たまの「随筆歳時記」買って来る。尿はしびん、大便も上向いたまゝ、便器にとる、空中へウンコする気持、西洋便所より上のものがあつた。夕刻「歳時記」読み了る。所在ないと小さな鏡——誰のかな、看護婦のらしい——でヒゲ顔をうつしてみる、パツとしない軟いヒゲだが、相当生へてゐる。少々残したくても残りさうもない、たよりないヒゲ。ロイド眼鏡かけると、一寸辰巳柳太郎の何かの扮装みたいだ。

社長より、今月分の月給届く。もうちゃんと手当が半分になつてゐるのは、当りまへだが、くさつた。

[54] 牧野富太郎「植物記」

豊後に梅の野生地を訪う

九州の豊後ならびに日向の地には梅の野生地があると聞き、是非一度はそれの实地見分を致したいものと思っていた。しかし何分東京より遠い九州の事であるので、思うに任せずこれまでその希望が達せられなかった^{うら}憾みがあった。

ところが今回、かねてあこがれていた梅の野生地を实地に見る事を得て、始めてその状況が判明し、年来の切望を果す事が出来た。

私は昭和十五年十月十八日東京を立って、かねて招きにあずかっていた広島文理科大学へ学生の实地指導と講義とに出掛けた。それが済むと、同月三十一日宇品港から出航して、その翌日すなわち十一月一日早暁に豊後の大分市に上陸した。

同地では大分県教育会が主となり、同国の臼杵町、佐伯町を中心として四日間植物の採集会が催されたので、ヘツカニガキの大木ある四浦村久保泊にも行き、またショウベンノキ、モクタチバナ、ヒゼンマユミ、スナゴショウ、クルマバアカネ、イワガネなどのある津久見島へも行った。

上の四日の内の十一月三日に梅の野生をヴィジットすべく赴いた。すなわちその目的地は豊後南海部郡^{インド}因尾村の地内であって、そこは佐伯町から^南稍南よりの西方七里も奥の地点で井ノ内谷という処である。ここは左右は山で、一条の溪流が山間の奥から流れ出で、入口の辺はその流れの附近にボツボツ農家が点在しているが、奥の方へ到るに従い人家は無くなる。この無くなったなお奥の方から溪流の兩岸に沿うて梅の樹が断続して野生して居り、その数はすこぶる多い。そして古木もあれば嫩木もある。また溪流へ落ち込む^{ちい}小さい谷川の奥、すなわち人家も無い山間にも生じているといわれる。聴て見ると井ノ内谷のその樹の総数は大小を雑えてザット千本ほどもあらんかとの事である。

今は丁度晩秋であれば、その葉も半ばは散っていて何の風情もこれなく、ただ大小の繁き枝が梅独特の樹勢を見せているに過ぎないのであったが、しかし春の花の時は全く俗塵を離れた境地で中々^よ佳い眺めであるといわれる。

聞く所によれば、以前は仕方の無い無用の樹として伐り棄て次第にした事もあり、植木屋が盆栽用としてその株を掘り取りに入り込み来ても、村人は

却てこんな邪魔な樹を除いてくれると喜んでいたとの事もあったが、近年その樹の減るのを惜しむ人々が出来てそれは禁制にしたそう。そして今日では時局柄梅の実に値が出て来たので却てその樹を大事がり、専ら実を採る事になっているとの由である。

この梅は支那と同様に果して日本にも天然に野生していたのか否か、私の窃かに考える所では、元来梅は日本の固有種では無いと断じたい。そしてこれは余程遠い昔に桃や李と同じ様に支那から伝えた者であろうと信ずる。九州は太古大陸からの人種が旧く入り込んで来た地であるから、それらの人々によりて持ち来たされ、それが元となって、大昔その人種の入り込みし処に次第に繁殖し、今日では世の変遷につれて最早やその人種はそこに居なくても、またその住所跡は全く湮滅して今は全く見られなくとも、その梅は依然として爾來悠久な星霜の間、葉落ち花開いて連綿その生を続けている者であるであろう。見渡す所今日非常に古い老樹は見当らんが、これは元来梅はスギ、クスノキをどの様に、そう永年生を遂げ得る樹では無いので、その間新陳代謝し、従て今では古代の樹は認め得られぬのである。そしてその繁殖はその梅の実が自ら地に落ち、すなわちそこに自然に仔苗が生えて縦まに生長するのである。梅樹が主として溪流に沿うた地に在る所を以て覩れば、梅の特性はこんな土地を好む者と見て差支えは無かろう。それは丁度カワラハンノキあるいはネコヤナギが河辺の地を好んで生活しているのと同じ理窟で水を見て暮すのが彼れの天性でがなであろう。

なお大分県の「史蹟名勝天然紀念物調査報告」第十五輯に拠れば、上の外、梅の野生地は、やはり南海部郡なる因尾村の黒岩、切畑村の提内、上堅田大越オオゴエの船河内フネカワチ、同じく富士河内フジカワチ、下堅田イシクチの石打にもあると記してある。そしてなおその他そこここにもあるとの事である。また日向の国の北部地にもあると聞いた。

昭和十五年十二月十四日大分県別府の温泉客舎にて記す